
悲しみの読者†

チシャネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲しみの読者†

【Nコード】

N3555K

【作者名】

チシャネコ

【あらすじ】

何の進展もないまま、月日だけが過ぎていた頃。焦るコナンたちの前に、突然、『読者』と名乗る人物が現れる！果たして、『読者』は何者なのか！？『敵』か？それとも『味方』か！？名探偵コナン最終回を、描いた物語。

【読者現る！】（前書き）

『名探偵コナン』が大好きで、遂に自ら小説を描いてしまいました！
展開がちょっと早かったりするけど、そこはご愛敬って事で。

それでは、私が創る物語をどうぞお楽しみ下さい…

チシャネコ。

【読者現る！】

パラ…パラ…

電気もつけず、微かな明かりさえない真つ暗な部屋の中。

一人の青年が、椅子に深く腰かけ、何やら真剣に一冊の本を読んでいた。

分厚い本の題名はこの暗がりでははっきりせず、何の話かは分からない。

だが、青年はまるで見えているかのようにページをめくっていく。

ふと、ページをめくる手が止まった。

それまで無言だった青年が、ぼつりと呟く。

「…もうすぐ、もうすぐ終わる。後は…これだけ。それが終われば、僕は…」

そこまで言って、青年は読んでいた本を閉じた。

…駄目だ。このままじゃ、物語は終わらない。

誰かの助けがなければ、この主人公たちは前に進むことが出来ない。

今のままでは、物語に変化がないままに時間だけが過ぎてしまう。

物語が終わらなければ、自分が解放されることもない。

…ならば。

青年は立ち上がった。

この牢獄のような家を出て、物語を進ませる為に。

「今行くよ。さあ、一緒に物語を終わらせよう…」

青年の静かな決意は、誰にも届かない。

一瞬だけ、月明かりに本の題名が見えた。

その本の題名は

【悲しみの読者】

場所は、とある探偵事務所の三階。

窓から見える景色には、早朝という時間帯にも関わらず、会社へと出勤していく人の姿が絶えない。

「毎日毎日。よく頑張るよなあ……」

おっちゃんと相部屋の窓から外を眺めて、俺はそう呟いた。

ふと見た時計の針は、午前の五時半を指している。

いつもなら、まだ眠っている時間だ。

実際、さっきからおっちゃんは盛大にいびきをかいて寝ている。

早起きの蘭も、この時間帯はまだ寝ているだろう。

昨日は遅くまで、買ったばかりの推理小説の新刊を読んでいたから、体は疲れているはずだ。

しかし、今日は何故かこんな早くに目が覚めてしまった。

今日は何かあっただろうか？

確か、少年探偵団のみんなとサッカーをする約束はしていたが……。

そんなの日常的な事だから、こんなに早起きする理由にならないはず。

二度寝しようにも、頭が冴えてしまつてどうにも眠れない。

結果、こうして窓から外を眺めているってわけだ。

「はあ……。こんな生活、いつまで続くんだろう?」

そう言つて、俺（今は江戸川コナンだが）はため息をついた。

俺の身体を小さくした、黒の組織の奴らの情報は全く掴めず。

灰原も解毒剤を作ろうと頑張っているが、まだ完成品は出来ていない。

焦つても仕方ないとは分かっているが、こんな風に一人で考える時間がある日は、どうしても気持ちが悪く焦ってしまう。

「まったく。辛いのは、俺だけじゃないのにな……」

灰原だって、辛い思いをしながら、それでも解毒剤を作ろうとして

くれている。

いつ殺されるかという恐怖に怯えながらも、必死に前へ進もうとしている。

灰原だけじゃない。

何も言わないが、俺の両親だって辛い思いをしているだろう。

そして、一番は…

そっと、視線を隣の部屋に向ける。

隣の部屋　　蘭の部屋だ。

部屋で寝ているであろう、蘭の事を思う。

…あいつには、待たせてばかりだ。

いっそ冷たくして、離れてしまえばいいのだろうが、どうしても自分の我が儘で離れる事が出来ない。

蝶ネクタイ型変声機で声を変えて、蘭に電話するたびに思う。

自分は、『工藤新一』はここにいるのに。

すぐ側にいるのに。

だが、今の俺は『江戸川コナン』だ。

蘭にバレてはいけないし、バラすつもりもない。

時々心は揺れるが、蘭を危険な目に遭わせたくはない。

だから、俺は一刻も早く奴らを見つけ出してやる。

もう、あいつを泣かせないように。

そして、この思いをあいつに伝える為に。

そう新たに決意した俺を祝福するように、ビルの中から朝日が昇った。

「コナン君、哀ちゃん！一緒に帰ろう！」

「おい、コナン！今日の約束、忘れてねえだろうな？」

「今日は、一緒にサッカーをする約束ですよ」

「わーてるって！いつもの公園でだろ？」

学校が終わって、いつも通りの会話。

歩美達に伝えてから、帰り支度をして教室を出る。

「そうだ！灰原、お前も来いよ！」

「あ、それいいですね。人数は多い方がいいですし」

「ああー！それいいね！ね、哀ちゃんも一緒にやろうよ！サッカー」

玄関を出た辺りで、元太が言ったのをきっかけに他の二人も言い出した。

それから、灰原を歩美が誘う。

その誘いに、靴を履きながら、灰原はいつものCOOLな顔で言った。

「私はパス。江戸川君がいるんだから、私がいなくても平気でしょう？それに、今日は用事があるの」

途端、三人から非難が上がる。

「ええ！哀ちゃん来ないの？」

「灰原、お前付き合い悪いぞー！！」

「まあ、用事があるのなら仕方ありませんか…」

落ち込む三人に対し、俺は灰原に向けて言った。

「…いや、灰原。お前も来いよ、サッカー」

「っ!?!? ちょ、ちよっと! 江戸川君?」

普段言わない俺の言葉に、灰原から声上がる。

それに対し、三人には聞こえないように声を落として俺は灰原に言った。

「ごこんとこ、お前ずっと地下で実験してただろ? 博士が嘆いてたぜ。…頑張ってくれるのは嬉しいけど、ちよっとは息抜きしねえと。な? だから、一緒にやるうぜ、サッカー」

俺がそう言ったら、あいつは目を一瞬驚いたように見開いた。

それから、いつものCOOLな表情に戻って歩美たちを見る。

「息抜き…そうね。やっぱり私も行くわ。吉田さんたちの活躍が、見たくなっただしね」

この発言に、三人の顔が明るくなったのは言うまでもない。

「じゃあ、また後でね。コナン君、哀ちゃん！」

「遅れるなよ！」

「それでは、荷物を置いたら公園に来て下さい」

一度家へ帰って荷物を置くため、三人とはここで別れる。

ちなみに、灰原は帰り道が途中まで一緒のためそのままだ。

「おう！また後でな！元太こそ遅れるなよ？」

「それじゃあ、吉田さん、円谷君、小嶋君。また後で」

そう三人に声を掛け、帰り道を歩く。

「貴方、随分と嬉しそうね。サッカーの話をしてる時の貴方、本当の子供みただったわよ？…そんなにサッカーが好きなの？」

「子供って…。悪かったな！最初はただ単に、探偵に必要な反射神経をつけるためだったけどな。でも、今はただ純粹にサッカーが好きだぜ」

照れた様に言う俺に、灰原は自分が聞いてきたのに関心がないように言った。

「そう。じゃあ、早く家へ帰って荷物を置いて来なくちゃね。大好きなサッカーに遅れないように」

「…お前なあ」

俺たちが、そう言いながらも歩を速めようとしたとき。

「へえ、サッカーか。いいね、僕も混ぜてよ。『偽りの子供』（フ
オルス・キッド）さんたち」

「「!!!?!」」

突然、目の前に一人の青年が現れた。

もともと人通りはそんなになかったから、いたのならすぐに気づく
はず…。

まして、青年は綺麗な銀白色の髪に、フ
ラ
チ
ナ
・
フ
ラ
ン
ク
下透き通るような碧い眼。

それに全身黒ずくめでちょっと分厚い本を片手に持っている。

まさに、どこかの神父様のような感じた。

こんなに目立つ外人に、まして探偵である自分が気づかないはずなのだが。

それに、隣には灰原がいる。灰原だって、人の気配に敏感だ。

こんな怪しい人物、更に黒ずくめな奴がいたら、即座に警戒するはず…。

だが、灰原を見る限りでは気づいていなかったようだ。

ひどく驚いた、それでいて怯えたような顔をしている。

「そうだろうねえ。探偵を性分としている君が気づかないはずないよね。僕、すごい目立つし」

そう言って青年は自分の格好を見た後、灰原に視線をやった。

「…それに、隣のお嬢さんもそうでしょう？だって、あの組織から逃げてるんだもの。逃げる為に、気配読むのに長けてるだろうし」

っ！こいつ、組織の事を知ってるのか！？

と、動揺している俺の心を読んだように青年は飄々と答えた。

「うん。知ってるよ。あ、別にあの組織だけじゃないよ？君が、あの高校生探偵の工藤新一だってことも。隣のお嬢さんが、元組織にいたシェリーだってことも。…みんな知ってるよ」

「なん、だって…？」

こいつ、俺たちの事を知ってるのか！？

じっと青年を睨み付ける。

青年は、胡散臭いが自信满满でどうも嘘を言っているようには見えない。

「嘘は言っていないからね。せれに、僕に嘘は通じないから、下手な嘘は逆効果だよ？君達の事は何でも知ってるんだ。工藤君」

その言葉に、俺はザッと全身の血が下がったような感覚に襲われた。

…何だ？一体何者なんだ、この男は。

さっきの俺の心を読んだような答えに、あの言葉。

「…お前、組織の仲間なのか？…いや、こいつが組織の仲間なら、今頃俺たちはここにいないはず」

ならば、こいつは何者だ？いやいや、待て待て。考える。

先に、一刻も早く灰原をこの場から逃がさないと…

俺がそう考えた途端、向こうが慌て出した。

「ちよ、ちよっと待ってよ。いきなり話し掛けたのは悪かったけどさ。逃げられるのは困る！特にお嬢さんは見つけるの大変そうだし。それに、逃げるかどうかは、話を聞いてから決めたらどう？」

くそっ！また、勝手に人の心を…。

でも、確かにこのまま逃げても俺たちの正体を知ってるんだ。

博士たちを人質にされれば、逃げる事に意味はない。

それに、奴の言っている事には一理ある。…話だけでも聞くか。

そう思い直すと、青年はホツとしたように言った。

「良かった、思い直してくれて。…で、そこのお嬢さん。その麻醉銃で、僕を眠らそうとしても無駄だよ？僕には、君の考えなんてすぐ分かるんだから」

青年が言った途端、灰原がすごく嫌そうな顔をした。

いつの間にか構えていた、予備の麻醉銃を下ろす。

…本当に、眠らす気だったんだろうか。

灰原は、憤然とした顔でさらりと嫌味を言った。

「あら。レディーの心を読むなんて、貴方失礼よ。…それで？貴方は一体、何者なの？」

その問いに、青年はニッコリと笑って答えた。

「僕が何者か、か。そうだね…。僕は通称『読者』と呼ばれている。まあ、ちゃんとした話は結構時間が掛かるから夜にね」

『読者』？…随分と、変わった呼び名だな。

俺がその考えると、読者は苦笑いを浮かべた。

…この野郎、また人の心を読みやがったな？

プライバシーの侵害だ、訴えてやる。

「まあまあ。そう怒らないですよ。今は、君達に挨拶に来ただけなんだ。じゃあ、またね工藤君。ここで待ってるよ。…真実を知りたかったらおいで」

俺を宥めながら言うと、読者は一通の封筒を渡してきた。

「封筒？なんで封筒なんだ？今、直接言えばって、…え？」

反射的に封筒を受け取って前を見ると、そこには誰もいなくなっていた。

まるで、最初から誰もいなかったように。

「いない…？あいつは、どこに行ったんだ？」

隣の灰原を見るも、彼女にも分からなかったらしい。

首を横に振って、封筒を指差した。

「その封筒、どうするの？…私は、開けない方がいいと思うけれど」

手元には、何の変哲もない白い封筒。

確かに、見ない方がいいのかもしれない。…しかし。

「けど、あいつの…読者の事を知るには、これしか手掛かりがないんだ。見るしかないだろ」

そう言って、結局渡された封筒を開く。

封筒の中には、一枚のカードと押し花にされた竜胆の花が入ってい

た。

「何だこれ。押し花？えっと、これは…竜胆リンドウか？もう一つはカードだな…」

入っていたカードには、こう書いてあった。

【汝が、真実の姿をさらけ出せる唯一の扉をくぐる時。

漆黒の闇に打ち勝つべく、
我は現れる。

時計の針が、天上を指す時。

愚か者たちは、空を見上げ祈るだろう。

我は静かに時を読む者。

私の居場所を知りたくば、
推理の道を開け。

そこに我はいるだろう】

「このカードに書かれてる文章、どうやら暗号みたいね？」

わざわざカードで、しかも暗号かよ。…凝ってるな。

まるで、某怪盗みたいだ。

思わず思考を、推理に沈めかけたその時。

灰原の冷静な声が掛かった。

「ちょっと、工藤君。それはひとまず置いて、一旦家へ帰りましょう。ここでは、道の邪魔だわ。吉田さんたちとの約束、どうする？」

確かに、このままでは元太たちとの約束に遅れてしまう。

だが、俺たちの問題に元太たちを巻き込むわけにはいかない。

…せっかく息抜きしようとしたのにな。

「…あいつらを巻き込むわけにはいかない。残念だが、今回の約束

は無しだ。あいつらには、後で俺が連絡しとく。…灰原、気をつけろよ」

俺が言うと灰原は頷き、それから真剣な顔で言った。

「そっちこそ、気をつけなさいよ。つまらない好奇心で、一人で勝手に行くことしないでね。…行く時は、私も一緒よ」

それに一瞬呆気にとられたが、睨みつける灰原に負けた。

…下手すると、薬盛られそうだったしな。

それから、一先ず俺は灰原を家まで送り届け、博士に事情を説明し、蘭の待つ家へと帰って行った。

理由は簡単。

蘭の無事の確認だ。

携帯にも掛けたが、繋がらなかったのだ。

おっちゃんは繋がったが、浮気調査をしていたらしく、「邪魔するな！」と盛大に怒られてしまった。

俺たちの正体がばれていたとしたら、蘭たちはまず最初の標的になるだろう。

蘭……!!無事でいてくれ……!

焦る思いを胸に、事務所へと急ぐ。

「はあはあ……見えた!」

事務所の階段を駆け足で上がり、勢いよく扉を開けた。

バンツ!!

「蘭……!!?」

「えっ!?!」

叫び声と共に扉を開けると、さっきの声にビクビクしている蘭が目に入った。

丁度掃除をしようとしていたのか、片手にごみ袋を持っている。

「蘭：姉ちゃん？」

「何だ、コナン君か。びつくりした。もう、どうしたの？そんなに慌てて…顔色悪いよ？大丈夫？」

蘭は、叫んだ相手が俺だと分かるとどこかホツとした顔で笑い、しかし、その顔を見て今度は心配そうな顔で聞いてきた。

「え、いや、あの…大丈夫、だよ」

「大丈夫じゃないでしょう？そんなに汗びっしょりかいて…何かあったの？」

そんな蘭に少し慌てながら、言い訳を考える。

「コナン君？」

「えっと…そう！今日、博士が新しいゲームを作ったから、またやりに来ないかって言われて。それ、中々難しいゲームらしいから、

僕、博士の家に泊まってやろうと思って、急いで帰って来たんだ！
だから…」

そう言つと、蘭の顔が呆れたようになる。

「またゲーム？しかも、泊まりがけつて…博士は何て言ったの？」

「博士は良いって言うてくれたよ？だから、良いでしょう？蘭姉ち
ゃん」

俺が頼むと、蘭は暫く考えた後「博士に迷惑かけないようにね」と
言いながら、やっと了承してくれた。

準備が出来ると、俺はそのまま博士ん家に行った。

暗号や灰原の事もあるし、しばらくは博士の家に泊まるつもりだ。

それに、幸いにして今日は金曜日だ。

学校に縛られずに、自由に動ける。

博士も灰原から事情は聞いているのか、俺の泊まりにすぐOKを出してくれた。

やはり、こうやって俺たちの事を理解してくれる大人がいるのはいい。

「もうじき日が暮れるのお。それで、新一。その『読者』が残したという暗号の方はどうじゃ？解けたか？」

夕方まで後ちよっと、という時間になって博士が言った。

灰原も、手に持っていた雑誌を横に置いて俺を見る。

その博士の問いに対し、一旦持っていたカードから目を離し、俺は自信たっぷり二人に頷いてみせた。

「ああ、解けたぜ。この暗号が示す『読者』が現れる場所と時間がな

俺がそう言つと、博士と灰原の顔に緊張が走る。

「何？分かったじゃと！？本当か新一！それは何処じゃ？」

博士が、驚いた顔のまま聞いてくる。

灰原も、無表情ながらも俺を見つめる目が、博士と同じことを言っているのが分かる。

そんな二人の視線を浴びる中、俺は自分の推理を話し始めた。

「まずは場所。それは、最初の行の【汝が真実の姿をさらけ出せる唯一の扉をくぐる時。】ってあるだろう？これは、俺と灰原が偽りなく、自然に話すことの出来る場所ってこと。つまり、博士の家か俺の家だ」

俺がそう言つと、灰原は冷静に頷いて言った。

「成る程？確かに、私や工藤君が本音を言える場所はその二カ所だけね。毛利探偵事務所じゃ、蘭さんたちがいるし。それで、どっちなの？」

聞いてくる灰原に、カードを見ながら俺は言った。

「どっちかというと、最後の行に【私の居場所を知りたくば、推理

の道を開け。】ってあるから多分、十中八九俺の家だろう」

それから、博士を見て続ける。

「博士の家なら、【推理の道】なんて言葉は似合わねえしな。どっちかってーと、研究の道だろ」

それには、灰原も博士も頷いた。：確かに。

「次に時間だが【時計の針が、天上を指す時、愚か者たちは空を見上げ祈るだろう。】とある。時計の針が、全部天上を向くのは12時。あいつが夜にと言った事を合わせると、午前0時ってことだ」

そして、最後にと付け足す。

「つまり、この暗号を要約すると、あいつは午前0時に俺の家の書庫に現れるってわけだ」

そこまで俺が言うと、博士が待ったをかける。

「ちょっと待て、新一。君の家というのは分かったが、何故それが書庫だと分かるんじゃ？」

そんな博士の戸惑ったような声に、俺はため息を吐きながら言った。

「はあ……。相手は『読者』って呼ばれていることを考えれば分かるだろう？俺の家で、『読者』が現れるのに最も適している場所だぜ？」

そう俺が言つと、博士は八つとした顔をした。

「そんなの、書庫しかねえじゃねえか。あそこなら、【推理の道を開け】って言うのも、納得がいくしな」

父さんが有名な推理小説家という事と、ホームズ等の本がたくさんあるあそこは、まさにうってつけな場所ってとこだな。

だが、一つ疑問が残る。

…あいつは、何で俺たちの事を知っていたんだ？

組織の仲間ではないとは言っていたが……。一体、何者なんだ？

「成る程、そうじゃのう。流石は新一だわい」

そんな納得したような博士を余所に、俺は一人思考の海に落ちて行った。

時刻は、約束の0時5分前。

俺と灰原は、俺の推理通り、俺の家の書庫にいた。

ちなみに、危険だからと言う理由で博士は家に置いてきた。

俺たちが行くまでに、大分渋っていたが、何かあったらすぐ駆け付けていいという事。

それと、盗聴器、発信器をつけるという事で納得して貰った。

「博士、大丈夫かしら？やっぱ一人にしない方がいいんじゃない？」

「大丈夫だって。俺の推理に外れはないさ。それに、いざとなりゃ、俺たちもあっちに駆け付けられるしよ」

博士を心配する灰原に、俺は努めて明るく言った。

そんな俺に対し、灰原は呆れたように、それでもいつもの感じで返す。

「あら、自信満々ね。もし、その推理が外れてたらどうするのかしら？名探偵さん」

「あの人……。あの暗号は、俺の推理した通りにしか考えられない。外れるかよ」

そんな他愛もない話をしつつ、警戒は緩めない。

何せ、俺たちの正体を知っている人物だ。

まだ時間になってないとはいえ、油断は出来ない。

それに、一応戦闘になった時の為に、キック力増強シューズと時計型麻醉銃は持ってきた。

これで、いつでも戦える。

灰原も、念の為博士が作った予備の麻醉銃を持ってきている。

自分の身は自分で守る、だそうだ。

不意に、灰原が時計を見て言った。

「…あと3分ね。来るかしら？彼」

「来るさ。自分で言い出したんだ。なら、来るだろ」

時計の針が、刻々と時間を刻んでいく。

そして、遂に、約束の時間1分前になった。

俺たちの顔に、緊張が走る。

残り30秒前…

3
⋮

4
⋮

5
⋮

1
0
秒前
⋮

2
0
秒前
⋮

2
∴

1
∴!
!

「やあ、よくあの暗号が分かったね」

「「っ！読者！」」

時刻が0時になった瞬間、何処からともなく読者が現れた。

突然現れた読者の格好は、昼間見たままの全身黒ずくめに分厚い本。

俺たちからそう遠くない本棚に寄り掛かり、面白そうにこっちを見ている。

「流石は、名探偵と呼ばれるだけはあるね。夕方になっても動き出さないから、もしかしたら来ないのかと思って、ちよっと焦ったけど…。その心配はいらなかったみたいだね」

偉い偉いと褒める読者に、俺は動揺を隠す為、努めて冷静に言った。

「ハント！あなたに心配される謂れはねえぜ、バーロー。それに…人様の家に、勝手に入るなんて、不法侵入だぜ？読者さんよ」

念の為に、入口にはちゃんと鍵を掛けておいたのに。

一体、奴は何処から入って来たんだ？

一方の読者は、俺の嫌味は気にしていないのか、ケロッとした態度

で言ってきた。

「あはは！不法侵入か…それもそうだね。でも、此処しかいい場所がなくってね。別の場所にしたら、子供の君たちは大変じゃないかなら、君の近くで馴染み深い場所がいいだろう？」

確かに、読者が言う通りこんな時間に子供二人がうるうるしていたら補導されてしまう。

それならば、馴染み深い自分の家の方がまだマシだろう。

「まあ、僕がいないと始まらないから不法侵入は仕方ないってことにしよう」

「仕方ないって…まあ、そうだがよ」

そう軽く言われて、俺は脱力して答えた。

こいつ、ノリが軽すぎる…。

飽くまでマイペースに笑う読者を見て、俺は何だか無性に叫びたくなかった。

「不法侵入云々は置いて…それで？私たちを呼び出した、貴方の目的は何？」

そんな中、それまで沈黙を保っていた灰原が、真剣な顔で口を開いた。

「っと！そつだ。…お前の目的は何だ、読者！？」

つい相手のペースに乗せられていたが、灰原の真剣な声に我に返った。

自然と俺の声も、真剣なものになる。

対する読者は、うーんと唸ると手首の時計を見た。

それから小さく、彼はまだ来ないのか…とか呟いてこっちを向いた。

「うーん、目的か。そつだね…。彼にも来てもらいたかったけど、どうやらフラれたみたいだし話しちゃおうか。うん、そつしよう」

「…彼？彼って誰だ？あんた、俺たちの他にも誰か呼んでたのか？」

何かを勝手に決めたような読者に、俺は気になったことを聞いてみた。

読者が言う『彼』は、俺たちに関係あるのか気になったし。

その俺の問いに、読者はああと言ってさらりと答えた。

「僕が呼んだのは、君たちと彼。月下の奇術師と謳われる、あの大怪盗。怪盗キッドだよ」

一瞬、読者が何を言っているのか分からなかった。

思わず、読者を前にして固まる。

隣にいる灰原も同じ気持ちらしく、固まっていた。

…何だって？

そんな俺たちの態度を見て、読者は不満げにもう一度ゆっくりと言
う。

「だーかーらー、怪盗キッドだよ。か・い・と・う・キ・ツ・ド！
彼がいたら楽になって思ったんだけど…。どうやらフラれたみたい
なんだよね」

「……………はあ？」

そう同時に言った俺たちは、別に悪くないと思う。

だって、あの怪盗キッドだぜ？

あの確保不能の平成のルパンとまで言われる、あの気障なコソ泥を
呼んだって…。

しかも、探偵である俺の家に。

「…来るわけないだろうが」

探偵の家にコソ泥を呼んだって、来るわけがない。

絶対、罠だと思っからだ。

まあ、よっぽどの事情があれば仕方ないが…。

まず、来ないだろう。

俺が読者に呆れていると、読者はもう一度時計を見て言った。

「うーん、でも約束の時間まで後5分あるから、一応待ってみてもいいかな…?」

まだ言うか。

こいつ、諦め悪いな。

俺と灰原がそう思ったその時。

「その必要はありませんよ」

「っ!?!?キッド!?!」

「ほら来た。待ってたよ」

そう言って、あの神出鬼没な大怪盗が、何処からともなく姿を現した。

…お前も不法侵入だ、キッド。

訴えて…いや、お前は捕まえてやる。

言ってもまるで無意味な読者から、標的をキッドに換え、さりげなく戦闘モードになった俺だった。

【読者現る！】（後書き）

【読者現る！】

いかがでしたか？

今回は、読者VSコナン達ということで、怪盗キッドが出るまでと
させていただきますました？

という事で、次回は、怪盗キッドのお話となります？

お楽しみに〜？

チシャネコ？

【鬼ごっこ】（前書き）

はい。今回は、怪盗キッドこと、黒羽快斗君の物語です。

ですので、視点は快斗君から始まりますので悪しからず。

では、私の創る物語をお楽しみ下さい…

「チャネ」。

【鬼ごっこ！】

時は遡って、読者がコナンたちに会った後のこと。

「ふああ……。今日も暇な授業だったぜ」

怪盗キッドの正体であるこの俺、黒羽快斗はのんびりと帰り道を歩いていた。

いつものように掃除当番をサボり、怒る幼馴染みの青子を置いて今は一人だ。

「ったく、白馬は相変わらず俺をキッドだって疑うし。それに今日は紅子の奴、また変な事言いやがるし……」

そう。いつもの通り、掃除をサボって帰ろうとした時。

何やら真剣な顔をした自称魔女の紅子が、俺を呼び止めて言ったのだ。

「黒羽君。貴方、今日は掃除をサボらない方がいいわよ」

「ああ？んなの、いつもの事じゃねえか。紅子には関係ないだろ」
そう言うと、紅子は人の話を聞いていないのか、遠くを見つめるような目で言った。

「【逢魔ヶ時、白き罪人が許に悲しき読者なる者降り立つ。彼の人、白き罪人に二つの選択を迫る。光の魔人の下、答えを誤るべからず。さすれば、白き罪人が望み、叶うだろう】」

「まあた、訳の分からない占いかよ…」

げんなりして言うと、紅子は不敵な笑みを浮かべて言った。

「占いじゃないわ。ルシファー様からの予言よ。…一応、気をつけたらよくなって？」

「はあ…白き罪人だか、悲しき読者だか訳分かんねえ。第一、俺は占いなんて信じねえんだよ！じゃあな！！」

そう言って、紅子の呼び止める声が聞こえたが無視して教室を出て行った。

「黒羽君！悲しき読者の選択が、今後の貴方の運命に関わるわ。決して、選択肢を間違えては駄目よ！！」

ああは言ったものの、紅子の占いは結構当たるからなあ。

それに、紅子が最後に言ったあの言葉。

「『悲しき読者の選択が、俺の今後の運命に関わる』、か」

何のことやら。

紅子の占いは、当たるが非常に文章がややこしい。

その大低が、その時になって初めて分かるのだ。

だから、今真剣に考えたって分からないはず。

ならば、最初から考えない方がいいだろう。

「さあて、ちやつちやつと帰って寝ますか！」

そう言つて、紅子の占いを振り払うように顔を振つて歩を進めたその時。

「こんにちは、黒羽快斗君。いや、月下の奇術師、怪盗キッドとお呼びするべきかな？」

「なっ!？」

突然、目の前に全身黒ずくめでいかにも怪しいという青年が現れた。

…誰だ?こいつ。

いきなりの青年の出現に動揺した俺だが、すぐに立て直して皮肉げに言った。

「どちらさま?てか、怪盗キッドって言つたら、あの世紀の大怪盗だろ?あの怪盗キッドに間違えられるのは光栄だけど、生憎と俺はただの高校生だね。マジックは趣味でやってるけど、今、世間を騒がしてる怪盗キッドなんかじゃないぜ。人違い」

皮肉を言ったにも関わらず、青年はどこか嬉しそうに頷いている。

「うんうん。その警戒心といい、素早い反応といい。それに、その見事なポーカーフェイス。流石、怪盗キッドをしているだけあるね」

「おーい、俺が言ったこと無視か？違うつて言ってるんだろ、話聞けよ」

「たく…てか、誰だよこいつ。」

その前に、どっから現れた？

怪盗キッドをしているだけあって、俺は人の気配などには特に敏感だ。

その俺が気付かなかったってことは……こいつ、強い。

見た目は二十五歳前後。

体格は俺とそう変わらないな。

一見したら、ただの優男みたいだ。………本当に強いのか？

「これで…だから…」

青年は俯いて、何やらぼそぼそと呟いてる。

うわぁ、こいつもしかして紅子と同じ……電波系？

思った瞬間に相手が睨み付けてきた為、ぱっと視線を逸らす。

が、相手にはバツチリ伝わったようで、不自然な笑顔のまま聞いてきた。

「…ねえ、今、君すんごく失礼な事考えてたでしょう？」

「何の事やら」

即答したが、相手は不自然な笑顔のまま言ってきた。

「一応言っとくけど、僕は電波系じゃないよ。だから、そこは訂正してほしいかな」

「な…!？」

クソッ、何で分かったんだよ!？俺、顔にも声にも出してないはずなのに!！

驚愕する俺に、青年は笑顔のままこっちを見ている。

その笑顔が、何だか微妙に泣いているようにも見えた。

…そんなに電波系扱いされるの嫌だったのか。

そんな微妙な空気に耐えられず、俺は青年から視線を外した。

と、とにかく、こんな変な電波系変人に構ってられない。

何よりも、こいつに関わったら何か面倒臭い事になりそうな予感がある。

俺は、目の前に立つ青年に勇気を持って向き直り、きっぱりと言った。

「あんたが電波系だとかそんなのは分からないけど、俺は怪盗キッ

ドなんかじゃないし、変な宗教に入るつもりも、悟りを開くつもりもありません！てなわけで、アディオス！！」

「え、あ、ちよっ…！！」

相手の返事を待たず、言ったと同時に元来た道を走り出す。

何せ、怪盗業で鍛えた脚力だ。

あっという間に、青年の姿は見えなくなった。

「ったく、今日は厄日か？白馬といい、紅子の訳わかんねえ占いといい。……あいつ、家にまで来るつもりじゃねえだろうな？」

その予想は、見事に的中する。

「…うわぁ。いるし」

裏道やら何やらを使い（…）、急いで家に帰って来たにも関わらず。

胡散臭い青年は、そんな俺より早く家の前に立っていた。

何処をどう行けば一番早く帰って来られるか計算し、今までで一番早く帰ってきたのに。

…どんな術使ったんだよ？

とりあえず、青年に見付からないよう気配を消し、もと来た道を逆走する。

何か、見つかったら嫌な予感するし。

第一、変人に関わりたくない。

しかし、不意に青年がこっちを向いた。

「あ！黒羽君！！待って！」

「やべっ！逃げろ！！」

制止の声を振り切り、猛ダッシュで駆けて行く。

「はあはあ……ったく何なんだよ、あの人。人の事、いきなり怪盗キッドだって言っつて。しかも、あいつ、何故か俺の名前も知ってたよな。何で……？」

俺の事を怪盗キッドだと言っつていて、更に名前まで知っつてる奴……

「……………あ」

そこでふと気づく。

いるではないか、一人だけその条件を満たしてる奴が。

「……白馬か？うん、あいつならやりそうだ。あの野郎、俺がキッドだって言い回っつてんじやないだろうな？人の個人情報ばらしやがっつて……。プライバシーの侵害だっつての！くそ、今度会っつたら、絶対とっちめてやるー！！」

今此処にはいない白馬に八つ当たり気味に叫び、風の如き速さで駆けて行く。

「ぜえ…はあ…ぜえ…も、もういない…みたいだな…」

暫く走った後、後ろを振り向いてついて来てないことを確認する。

ついでに、相棒の鳩まで使って周囲にいない事を確認した。

「これからどうしようか…」

今帰ったら、何かまだ家の前にいそうだ。

というか、確実にいるだろう。

…このまま、もうちょっと経ってから帰ろう。

「…たく…余計な体力使わしやがって…」

走るのを止め、文句を言いながら歩いていると、見渡しのいい場所に出た。

休憩がてら、近くのガードレールに腰掛ける。

「あの変人の性で、えらく時間食っちゃまったじゃねえか…。今何時だ？」

ふと時計をみると、5時半過ぎくらい。

空は夕焼けに染まっている。

「おお、綺麗な夕焼けだな。目茶苦茶に走ってきたけど、いいもん見れた」

そのまま暫く夕焼けを眺めて、ふと気づいた。

「…あれ？このぐらいの時間って確か…」

「逢魔ヶ時っていうんだよ。よく、魔物が現れる時間だって言われている」

「…あんたっ!?!」

また、いつの間にか、隣にあの青年が座っていた。

こいつっ！撒いたと思ったのに！！

いつの間にか隣に座っていた青年に対し、俺は思い切り睨みつけた。

しかし、青年はそんな俺に対し、事もなげに言うてくる。

「全く…君が逃げるから、予定が狂っちゃったじゃないか。もう逃げないでね。何処へ逃げても、君の居場所なんて、簡単に分かるんだから」

あれだけ走ったのに、すぐ追いつかれた。

目茶苦茶に走ったから、行き先を特定する事は出来ないはず。

なのに奴は、あっさりと俺を見つけやがった。

それに、さっきのあの言葉。

奴は、何を使っているのか、俺の居場所を特定する事が出来るらしい。

これでは、力の限りいくら逃げても無駄な気がする。

最悪、部屋の中まで現れそうだし。

「はあ…分かったよ。もう逃げない」

結局、俺は逃げるのを諦めた。

何かもう、疲れたし。

「それは良かった。僕としても、追いかけてこっちは避けたかったからね。偉い偉い」

「……………」

どうも、奴の掌の上で躍らされている感覚が抜けない…。

ニコニコと俺に笑っていた青年は、ふと空を見上げた。

そして、どこか感心したように呟く。

「でも…どうやらこれもシナリオ通りだったみたいだね」

夕焼けに染まった空を見て、どこか悲しげに呟く青年。

シナリオ…？本とかを書くときのあれか？

「…何で俺に付き纏う？それにシナリオって何だ」

低く問いただすと、青年は何でもないうように言った。

「シナリオはシナリオだよ。それにしても…へえ、どうも素晴らしい力を持ったお嬢さんと知り合いのようだね。さすがは、紅き魔女の予言だ。僕の事を予知出来るなんて…」

最後の方は、独り言のように言ったが、耳のいい俺にはバツチり聞こえていた。

…何か、聞き覚えのある単語が出てきたぞ。

「紅き魔女？予言？…もしかして、紅子の占いの事か？」

俺が聞くと、青年は考えるように言った。

「んー？ああ、多分そうなるね。まあ、僕は紅き魔女に会ったことないけど」

やっぱり紅子の事だったか。なら、こいつは…。

「てことは、お前が紅子が言っていた『悲しき読者』か？」

青年の言ったことに反応した俺は、思い切って聞いてみた。

それに、青年は俯いていた顔をこっちに向けてにこやかに笑って言った。

「そうだよ。僕は読者って呼ばれてる。よろしくね、黒羽快斗君。彼女の予言を聞いたんなら、分かるよね？僕は、君に選択肢を持って来たんだ」

やっぱりな。

こいつが、紅子の言っていた『悲しき読者』か…。

あの分厚い本を持つてるから、そう呼ばれているのか？

そう俺が思っていると、読者は笑って言った。

「あはは、半分当たり。で、半分ハズレだよ。この本っていうポイントはいいけどね」

「っ！？」

まだ、何も言っていないのに！心を読まれた！？

ポーカーフェイスは…うん、崩れてなかったよな。

なら、何故あいつは俺の考えが分かったんだ？

…いや、今聞いてもこいつは答えてはくれないだろう。

あいつが何者なのか考えるのは、とりあえず相手の話を聞いてからだ。

「それで、俺に何の用だ？」

そう考えた俺は、さっそく本題を読者に聞いた。

それに、読者は頷いて言った。

「だから、まずは一つ目の選択！これから僕が言うゲームを『やるか、やらないか』さあ…どっち？」

「ゲーム？」

何だ、ゲームって。

いきなりそんな事を言い出した読者に困惑しつつ、話を聞く。

「そう、ゲームだよ。ルールは簡単。僕の出す三つのお題をクリアしてごらん。全てクリア出来たら、次の選択肢をあげる。三つクリア出来なかつたら、それで終わり。もちろん僕は消えるし、選択肢もないよ。さあ…どうする？」

こいつ、茶化した風に言ったが目が真剣だ。

多分、次の選択肢の方が重要なんだろう。

だから、その選択肢を言うに足るかこのゲームで試すつもりなんだ。

そして、勝てば選択肢を。負ければ、痕跡一つ残さず消えるだろう。

俺を試すっていうのは正直気に食わないが、紅子の言った話も気になる。

…まあ、紅子自体が魔術だの、予言だの怪しい事この上ないから、こいつもその類いの奴なんだろう。

ならば…。

目の前にいる読者を睨みつけ、俺は言い放った。

「…上等だ。そのゲーム、やってやるうじゃねえか！」

俺がそう言った瞬間、読者は頬を緩ませた。

【鬼ごっこ！】（後書き）

物語は、お楽しみ頂けましたでしょうか？

別名：読者VS黒羽快斗
といったところでしょうか。

さてさて、次からがゲーム本番！！

読者は、一体何を言ってくるのか！？

そして、快斗君はクリア出来るのか？

次回をお楽しみに〜？

チシャネコ。

【ゲーム開始!】(前書き)

さてさて、黒羽快斗君VS読者の続き。

これから、ゲームを開催いたします

では、私が創る物語をお楽しみ下さい…
「チャネコ」。

【ゲーム開始!】

読者はニツコリと俺を見ると、最初のお題とやらを言った。

「それじゃあ、最初のお題。これから、三分以内に近くの公衆電話を探してね。君の前に、誰かが先に取ったらアウト。ゲーム終了だよ」

「さ、三分!??つて、短っ!!!」

出されたお題に驚愕する俺を余所に、読者は楽しそうに笑う。

「それじゃあ、頑張つてね。月下の奇術師さん?」

と、そこで強い突風が吹いた。

「うわっ!!!」

その風に、思わず目を閉じる。

「...あれ?いない?」

次に目を開けると、そこには誰もいなかった。

まるで、最初から誰もいなかったように。

「何だったんだ、あいつは。…お化けか、はたまた幽霊？」

俺、靈感ないんだけどなあ。

そんな非科学的な事を言っていると、読者がいたと思われる場所に何か落ちていた。

「何だ、これ？」

そこには、一輪の竜胆の花が落ちていた。

この近くに花屋はないし、竜胆も咲いていない。

てことは、これは読者がわざわざ置いて行ったって事で。

そうすると、今までの事は全部夢じゃないということになる。

「って、公衆電話探さねえとー!!」

竜胆の花を拾ってのんびり解析していた俺は、その事実思い当たると慌てて公衆電話を探して走った。

ジリリリン。ジリリリン。

「はあはあ…。あ、あつたー!!」

やっとこさ見つけた公衆電話は、あいつがいた所から猛ダッシュして、三分ピツタリの所にあつた。

「はいー!もしもし!?!」

『おお、どうやら無事見つけたようだね。良かった、良かった。第一のお題、クリアだよ。おめでと〜!』

ひどくのんびり言う読者に、俺は一瞬殺意が芽生えた。

てめえ…。ここまで、どんだけ走ったと思ってやがる…。

そんな俺の様子が分かっているのか、いないのか。

読者の苦笑したような気配が、電話越しに伝わってきた。

『あはは。そんなに怒らないですよ。これでも、感心してるんだからさ。じゃあ、第二のお題。ここから15分以内に、近くの駅の列車に置いてあるスーツケースを見つけてごらん』

「今度は15分以内かよ……」

でも、さっきよりは余裕が…

『あ、言い忘れてたけど、後10分で列車が発車するから急いだ方がいいよ〜』

「ぬぁにー!?!?」

てことは、5分以内に駅に着けということか!??

『あはは〜! 頑張ってね』

「くそっ!?!?!」

電話を切って、近くの駅へとまた走る。

「くっそ〜！やっぱり今日は厄日だ…」

やっと着いた駅には、列車がいつぱい入っていた。

えっと、あの時、後10分で発車するとか言ってたよな。

呼吸を整えつつ、電磁掲示板を見る。

その列車は、一つだけだった。

【米花駅行きの列車が到着します。ご乗車の方は白線の内側まで…】

「これだー!!」

切符を買って、即座に列車に飛び乗る。

俺が列車に乗ってから数瞬後、後ろのドアが閉まった。

「あ、危ねえ！ギリギリセーフってか？」

乱れた息のまま、列車内を探す。と、あった。

黒いスーツケースに、『黒羽快斗様へ』と書いた手紙が乗ったのが、でーんと席に置いてあった。

「ぜえ、はあ、ぜえ…。ふ、ふざけんなよ、あの野郎！！」

わざわざスーツケースを席に置いたのは、読者の優しさか。

俺はスーツケースを下に置いて、その席に座った。

「はあ…。次は何だ？」

息が整うと、ケースと共に添えられた手紙を開く。

『おめでとう！第二のお題、クリアだよ。いや、よく間に合った
ね』

その瞬間に、俺が手紙を破りたくなつたのは言うまでもない。

何とか手紙を破りたいのを堪えて、続きを読む。

『さて、これで最後だよ。最後のお題は、米花町にいる僕を見つけてごらん。0時5分までにおいで。ちなみに、僕は0時からその場所に現れるよ』

「はあ！？この広い米花町の中からか！！？」

しかも、現れるのは0時から。

ということは、場所を間違つたら即ゲームオーバーって事だ。

「そんなの無理って…ん？」

そう俺が嘆いていると、手紙の一番下にまだ続きがあった。

『今回は難しいから、特別にヒントをあげるね。ヒントは【偽りの姿 真実の姿】。この場所に僕はあるよ。君なら分かるよね？……待ってるよ、怪盗キッド君』

手紙はそこで終わっていた。

ちなみに、スーツケースの中には、ご丁寧にも米花町の地図とミネラルウォーター。

更に、片手で食べられそうなお菓子が入っていた。

確かに、走り回って喉渴いたし、腹は減ったけどよ。

…随分と、用意周到じゃね？

まあ、ありがたくミネラルウォーターを頂きお菓子も食べる。

そうやって、やっと一息ついたところで列車は米花駅に到着した。

駅のホームを出て、近くのベンチにとりあえず座る。

それから、スーツケースから地図を取り出した。

「これが米花町か。うわ、やっぱり広いな…」

携帯で時間を見ると、今は夜の7時50分。

約束の時間まで、4時間ちよっととってとこか。

「今日は帰れそうにねえし、連絡しとくか」

一応、今日は用事があるから帰れないと家に連絡しておく。

ついでにジイちゃんにも、もしもの場合に連絡する。

そしたら、随分と心配されてしまった。

「ったく…。相変わらず心配性だな、ジイちゃんは…」

電話を切り、さっきの手紙をもう一度見てから歩き出す。

「【偽りの姿から真実の姿】か。…まるで俺みたいだな」

当てもなく歩きながら、俺は小さく呟いた。

『怪盗キッド』は、俺の偽りの姿であり、しかし真実の姿でもある。

対して、ただの高校生である『黒羽快斗』も、真実の姿であり、また、偽りの姿でもある。

二人は表裏一体であり、切り離すことなどできない。

それは、俺が怪盗キッドをしている限り、仕方のないことだけれど。

キッドに罵声を浴びせる幼馴染みの声。

分かっていても、時々切なくなる。

俺は愉快犯なんかじゃない！

俺は、ただ真実が知りたいだけなんだ！！

そう叫びたくなる。

もちろん、叫ぶことなど出来ないのだけれど。

そう暗い思考でボーっと歩いていると、ふと一人の人物が浮かび上

がった。

「…そういえば、俺の他にもう一人いたな」

小さくなった名探偵。

何がどうなって小さくなったかは知らないが、探偵をやっている彼の事だ。

何かの事件に巻き込まれたのだろう。

あいつも、幼馴染みから正体を隠して生活している。

俺と同じ、いつか真実を知る為に。

「…ん？ちよつと待てよ？」

そういえば、紅子の予言には確か…。

俺の頭に、紅子が言った予言が浮かんできた。

『【逢魔ヶ時、白き罪人が許に、悲しき読者なる者降り立つ。彼の人、白き罪人に二つの選択を迫る。光の魔人の下、答えを誤るべからず。さすれば、白き罪人が望み、叶うだろう】』

「…光の魔人？」

彼の人は、読者だよな。で、白き罪人が俺。

ならば、光の魔人とは？

「えーと…確か、前のヤバかった時計台の時に紅子が言ってた奴の事だよな」

もう本当、捕まるかと思ってヒヤヒヤしたぜ。

後で分かったけど、あの時のジョーカーは工藤だった。

つまり、光の魔人とは工藤の事で…。

「てことは、あの野郎は工藤のところにいるってことか？」

それだと、あのヒントにも説明がつく。

あいつが偽りの姿から真実の姿に戻るのは、あいつの家か、お馴染みの博士の家だ。

それに、工藤の家はちょうどこの米花町にある。

「決まりだな。目的地はあいつの家！そうと決まれば、早速……って今何時だ？」

ポーツと考えながら歩いていたら、時間が分からない。

ポケットから携帯を取り出し、時間を見る。

「え〜と、今は…10時20分。うわっ、あれから約二時間もポーツと歩いてたのか。凄い集中力だな、俺」

そう自分に感心していると。

ぐーぎゅるるる…。

「あ」

俺の腹が盛大に鳴った。

「…流石に腹減ったな」

そついや、お菓子を食べたきりでまともなもんを食ってなかった。

「『腹が減っては戦は出来ぬ』ってか？」

誰に聞かせるわけでもなくそつ言って、近くのコンビニに駆け寄る。

そこでサンドイッチとジュースを買って食った。

やっぱ、腹減ってたから美味いね。

ここから工藤の家までは、歩いて20分。

約束までには後一時間はあるから、十分間に合うだろう。

「待ってるよ、読者。お前が言う真実。必ず掴んでやる!!」

その前に…あいつを絶対、一発はぶん殴ってやる。

確実に読者に遊ばれたことに対し、静かに怒りを燃やす俺だった。

「っと、約束まで時間あるし。近くの隠れ家にも寄るか」

工藤邸に向かう途中、隠れ家に寄ることにした。

流石に、走り回って汗だくの格好でいつまでもいたくはない。

隠れ家でシャワーを浴びて、白い戦闘服を身に纏う。

時刻は、ちょうどいい感じに11時30分。

「さてと…予告状も何もないけれど、仕方ない。向かうは工藤邸。
さあ、シヨアの始まりと行きますか!!」

そう気合いを入れて言うと、俺は隠れ家のベランダから飛び立った。

【ゲーム開始!】(後書き)

別名：黒羽快斗君VS読者。

楽しんで頂けましたでしょうか？

完全に、遊んで創りました

今回は、再び場面をコナン達に戻して話しは進みます。

それでは、次回お楽しみに。

チシャネコ。

【いざ、選択!】(前書き)

はい、チシャネコです。

今回は、場面をコナン達に戻してお送り致します

それでは、私の創る物語をお楽しみ下さい…

【いざ、選択！】

突然現れたキッドを交えて、場は混乱していた。

目の前には、あの確保不能と言われた大怪盗が。

目の前には、あの迷宮なしと言われた名探偵が。

俺は、まさかあのコソ泥が本当に来るとは思ってたし。

相手も、まさか俺がいるとは思ってなかったようだ。

両者ともしばらく無言で固まり、しばらくしてキッドが口を開いた。

「なあ、読者さん。この状況、どういう事か説明してくれない？ど
うして、ここに名探偵とお嬢さんがいるのかな？後、一発殴らせて」

キッドの低く問い掛ける声を裏切るように、対する読者は明るく答
える。

「やだなあ、そんなに怒らないでよ。ここに来れたって事は、最後
のお題は解けたってことだね。おめでとう！晴れて、君は合格だ

「よ」

「お題って？」

「…そこは気にしなくていいから。で、俺の質問に答えてくるない？な・ん・で、名探偵たちがいるのさ」

読者の言葉が気になった俺がそう呟くと、キッドは若干疲れたような感じに言って読者を睨んだ。

「あはは、そうだね。全員揃った事だし？…さあ、始めようか。物語の終演に向けて」

そう言つと、読者は語りはじめた。

「まずは、自己紹介からだね。僕の名前はソラ。通称、読者って呼ばれてる。何でそう呼ばれているかというのは、後で説明するね」

そう言つて、読者　ソラは、一瞬悲しそうな目をした後に続けた。

「そして、僕の目的は、君たちの物語を終わらせること。…ただ、

それだけだよ」

「物語を…」

「終わらせる?」

「…どっぴいっ事?」

俺たちが困惑していると、ソラは説明してくれた。

「誰も、自分の物語を持っている。物語っていうのは、分かりやすく言い換えれば、その人の人生かな。僕は…まあ、とある事情でその物語を読んでいるんだ」

そして、持っている本を上に掲げ、更に続けた。

「そして、この本の最後の物語は君たち三人。『工藤新一』と『宮野志保』、そして怪盗キッドである…」

「待ったー!! ちょっと待ったー!! うおーい!!」

「うわぁ!?!」

ソラの爆弾発言に、キッドが思いつ切り待ったをかけた。

そのままソラに詰め寄って、大声で怒鳴る。

「ちょっと、あんた!今、あんた流れるに俺の正体さらつと言おうとしただろ!?!何言おうとしてるんだよ!?!そういうのは、言っちゃ駄目でしょうが!?!特に名探偵には!」

必死なキッドの顔色が、心なしか悪いように見える。

確かに、俺たち(探偵+一般人)の前で勝手に言っても良い事ではないだろう。

「ええ〜言っちゃ駄目なの?」

「いいじゃないか、別に」

話を中断されたソラは、ぷくーっと頬を膨らませて不満げに言った。

それに対して、キッドは更に大声で叫ぶ。

「良いわけあるかー！！怪盗の正体を簡単にバラそうとするなんて…。何考えてんだよ、あんた！？」

叫ぶキッドに、ソラは煩そうに耳を塞ぐ。

「むう。うーるーさーいー」

「黙らっしやーい…！」

再び叫ぶキッドに、俺は不覚にも同情してしまった。

…そりゃ叫びたくもなるだろうな。

隣を見ると、灰原は興味津々とその光景を見ている。

まあ、月下の奇術師と謳われるあの気障なコソ泥が、こんなに叫ぶ姿など滅多にみえないだろうし。

しばらく、二人がぎゃあぎゃあ言っているのをのんびりと眺める。

…さっきまでのシリアスな空気はどこへ行ったのやら。

白熱する二人は、何回目かの攻防で、ソラがキッドに叫ぶように言った。

「じゃあ、何て呼べばいいのさ？キッド？黒羽君？それとも快斗君？」

「だーから、そうやって呼ぶんじゃ…っ！？」

ぴきーんと固まったキッドに、しまった！という顔のソラ。

…あれ？今、何か重要な事ポロリと言ってなかったか？

「…クロバカイト？」

きつちり聞いていた俺がそう呟けば、キッドは一瞬硬直したが、すぐに普段通り言ってきた。

「クロバカイト？誰だよ、それ。適当な事言っんじゃねえよ」

「いやいや、オメーさっき『そうやって呼ぶんじゃ…』って言うってただろが」

「あれは、つい出たんだよ。所謂、ノリ？」

「それに、さっき俺が呟いた時一瞬硬直したな」

「それは、びっくりしたからだって」

「更に、言った相手がオメーの正体を知っているらしいソラだ。嘘を言っている可能性もあるが、さっきは言い合いが白熱していた。白熱している中で、偽名が出て来るとは思えない」

「……………」

そんな風に証拠をどんどん上げていくと、キッドの顔はまだポーカ
ーフェイスを保っているが若干強張ってきた。

「で、今までの流れ、そして証拠から推測すると、『クロバカイト』
がオメーの本名だな？」

だが、その態度で益々確信した俺が言うと、今度こそキッドは観念
したように地面に崩れた。

その崩れる様子に、ソラは、あちゃーという風に額に手を当てている。

こうして、こんな思わぬ形で大怪盗の本名が明らかになったのだ。

その後、観念したソラが正式な名前を言い、キッドが更に不機嫌になった。

「さて、話が逸れたから続きといこう。…黒羽君も、そんなに睨む

なよ。さっきのは、僕が悪かったって」

今だムツスリとして黙り込んでいるキッドこと黒羽に、ソラは申し訳なさそうに謝った。

「悪かったですむか、この馬鹿野郎ー！ああもっ、よりもよって名探偵にバラすなんて…。最悪だ」

さっきから、ずっとこんな感じだ。

おかげで、全くもって話が前に進まない。

…まあ、誰だってこんなになるだろうがな。

黒羽が言う通り、よりもよって天敵である探偵に正体がバレたんだから。

あいつにや最悪だろう。

「いつまでも、うじうじしてないの。貴方、男でしょ？」

「う”う”だ、だつて」

あの怪盗キッドが、見た目小学生の女の子に怒られてる。

…何かシユールだ。

「はあ…分かったよ。お前が怪盗キッドだつてのは誰にも言わないから。だから、少しは落ち着け」

結局、俺がそう言う事で黒羽は落ち着いた。

俺としても、こんな不本意な形でこいつを捕まえたくはなかったし。

黒羽が落ち着いたところで、漸くソラが話を続ける。

「さて、話を続けるよ。さっきも言った通り、この本にはみんなの物語が記されている。そして、最後の物語は君たち三人だ。ここまでは分かったね？」

「ああ」

それぞれ頷く俺たちを見て、ソラは続けた。

「僕は、この物語を終わらせる為に君たちの前に現れた。…しかし、君たちにとっては突然の事だろう。そこで、君たちに選択肢をあげる」

「選択肢？」

何だ？選択肢ってのは。

俺と灰原が疑問に思っ中、黒羽だけはそれが分かっていたように言っただ。

「やっと出たか。で、その選択肢ってのは？それが本題なんだろう？」

黒羽がそう言うと、ソラは何だか残念そうな顔をした。

「…黒羽君は、もう二回目だもんね。あーあ、君の驚いた顔が見えなくて残念だな」

「うるせえ。とっとと言いやがれ！」

今の二人の言葉からすると、これの前にも、黒羽は何か選択肢があったんだな。

で、黒羽がソラを嫌っている様子から、その選択肢つてのは結構嫌な事だったんだろう。

そう考えていると、俺に気づいたソラが笑う。

「あはは…その考えは、半分当たりだよ、工藤君」

こいつ…また勝手に!!

俺が静かに怒りを燃やしていると、ソラは急に真剣な顔になった。

「遊ぶのは、ここまでにして。じゃあ、選択肢を言うね」

真剣な顔のソラに、みんなの視線が集まる。

そのみんなの視線を受けながら、ソラは選択肢を言った。

「突然現れた怪しい僕を、君たちの仲間に『するか』『しないか』。『さあ、どっち?』」

「なん…だつて?」

こいつを、ソラを仲間にするか、しないか…だと?

「そう。よく考えて決めてね。この選択肢で、君たちの物語の行く道が決まるから。決まったら言つてね」

それだけ言うと、ソラは近くの本棚を物色し始めた。

さて、どうするか…。

俺が考えていると、灰原が静かに近づいてきた。

「工藤君、貴方どうするの?」

「灰原?」

見た目は冷静だが、どこか怖がっているようにも見える。

灰原は、ちらつとソラの方を見ると、小さく釘を指してきた。

「…貴方、分かっているでしょうね？私は、反対だわ。考えてみなさい。本人の言う通り、いきなり現れたのよ？あの人を信用するのは危険よ。謎が多すぎる」

「確かに、そうだが…」

こいつが怪しいのは事実。

灰原が言う通り、何の前触れもなくいきなり俺たちの前に現れた。

しかも、俺たちの正体を知っているという時点でもはや普通じゃない。

いや、もしかしたら、本当は黒ずくめの男たちの仲間かもしれない。

灰原の言う通り、仲間にするのは危険だ。

怪しい奴を仲間にしてバランスを崩すより、このままを維持するのがベストだろう。

その方が安全だし、リスクも少ない。

…しかし、だ。

…もし、こいつの言っている事が全て本当だとしたら？

ただ純粹に、俺たちに協力したいと思っていたとしたら。

こいつが、不思議な力を使うって事は分かっている。

実際に、俺もこの目で見たからな。

こいつを仲間にするれば、これほど心強い奴はいないだろう。

今の状況を変える事が出来るかもしれない。

だからこそ、考える。

本当に、このチャンスを捨てていいのか？

黒の組織に関する情報は、少しでも多い方がいい。

しかし、それに応じて俺たちの危険も高くなる。

俺は、俯いていた顔を上げた。

気配が変わった俺に気づいたソラは、静かに微笑んで言った。

「うん、なかなかいい顔をしている。…どうやら、答えが決まった
みたいだね」

「ああ。決まったぜ」

それに返して、しっかりとソラと目を合わせた。

自分を見つめる俺から目を逸らさずに、ソラは言った。

「ならば聞こう。僕を仲間に『する』か『しない』か。さあ……どう
ちだい？」

「俺の答えは……」

考えに考えた末、俺が出した答えは……。

「ソラ……いや、読者。全ての物語を読む者。俺は、お前を仲間に

『する』！！』

「なっ！？工藤君！！？」

信じられないと言う顔をする灰原と、満足そうに微笑むソラ。

俺の答えに、当然、灰原は猛反発した。

「ちよ、ちよつと工藤君！！貴方、何考えてるのよ！！」

「まあまあ、落ち着けて」

「そんな、落ち着けるわけないでしょう！？私言っただわよね？あの人は危険だって」

叫ぶ灰原に対し、ソラはさも嬉しそうに言った。

「ふふふ…君ならそう言ってくれと思ったよ」

そのソラの言葉に、灰原を宥めつつ不機嫌そうに返す。

「…勘違いするなよ。俺はまだ、あんたの全てを信じたわけじゃない。少しでも妙な動きを見せたら、すぐに警察に連れて行ってやるからな」

「うわぁー、手厳しいなあ。でも…それでこそ名探偵に相應しい。それに、信用してもらうなんてのは僕の今後の努力次第だしね」

そうあっさりと納得するソラに、灰原は呆れた視線を送った。

「随分と軽いのね、貴方」

「酷いなあ。僕はこれでも、真剣なんだけど？」

そう軽口を叩いて、今度は黒羽の方を向く。

「黒羽君は決まったのかな？僕を仲間に『する』か『しない』か」

その言葉に、俯いて考えていたらしい黒羽は顔をあげた。

「…そうだな。あんたを仲間にするや、確かに何かが変わるかもしれない。だが、リスクも今までより大きくなる」

「物事は、少々のリスク無しには進むことは出来ないものだよ。それで？」

ソラの一言に、黒羽がキッと睨み付ける。

対するソラは、微笑みを崩さない。

「……………」

暫くの間、二人は無言で。

「ふふふ……………」

ソラは笑顔を絶やさない。

「はぁ……………」

その様子に一つため息を吐き、黒羽は言った。

「ああもう！分かったよ！俺の負け。しょうがないから、お前たちの仲間になってやるよ。ったく、これでいいんだろ！」

「やった！これで仲間が揃ったね。これからよろしく。黒羽君、工藤君、宮野さん」

「ああ、よろしくな」

「…仕方ないわね」

こうして、黒羽も加わり俺たちに新しい仲間が増えた。

【いざ、選択！】（後書き）

【いざ、選択！】
如何でしたか？

今回の話で、ソラと快斗君が仲間になりました

次は、ソラ的能力がちょっとだけ明らかに！？

次回をお楽しみに！

チシャネコ。

【読者の秘密！】（前書き）

さてさて、次は読者ことソラの秘密を少しだけ

では、私の創る物語をお楽しみ下さい…

チシャネコ。

4/5の更新時に、少し手違いで、内容が繋がらなかったと思います。どうもすいませんでした。

【読者の秘密！】

「さて、晴れてこのメンバーが仲間になった事だし、僕の秘密を少しだけ教えようかな」

その言葉に全員脱力し、黒羽が言った。

「この…少しだけかよ！！ケチ臭い奴だな」

「まあまあ、謎は多ければ多いほど解けた時面白いでしょ？」

それからソラは、にこやかに笑って続ける。

「てことで、まずはさっきから皆が気になってるこの『本』について説明するよ」

そう言って、分厚い本を開く。

「僕が、みんなの物語を読む読者だったのは分かってるよね。…この本は、そのまんまの意味だよ」

「は？そのままの意味？」

どついう意味だよ。

止まる俺らに、逆にソラが聞いてくる。

「あつれ〜？分からないの？」

「そんなんで分かるか！もっと分かりやすく説明しろよ」

とりあえず、みんなを代表して俺が言ってみた。

詳しい説明をプリーズ。

怒る俺に、ソラは軽く謝って説明をしてくれた。

「だからね？この本には僕が指定した人物、主人公たちに起こった出来事や、主人公たちに深く関わりある人物についての詳細が、リアルタイムで記されてるの」

……はい？

「つまり、簡単に言うと、これ一つが極秘事項が載っている重要書類だね」

あまりにも、そう、あまりにもソラがあっさりと言っから、俺たちは一瞬固まってしまった。

「ん？どうしたの？」

呑気に返すソラ。

そのソラの言葉で、俺たちの金縛りが解けた。

俺と黒羽が、同時に叫ぶ。

「「な、何だとお！？」」「

「「うわぁっ！？」」

そんなソラは放っておいて、俺は今聞いた情報を必死に整理していた。

えっ？えっ？ちょっと待て。つまり…？

それって、要するに俺たちの知りたかった情報が書いてあるってこととで…。

「それって、もしかしてあの組織の事も載っているのか!？」

「もしかしたら、奴らの事も…?」

俺と黒羽の両方が、ソラに詰め寄る。

「もちろん、載ってるよ」

「「「!?!?!」」」

灰原に至っては、驚きのあまり口を開けたままだ。

無言で喜ぶ俺たちに、ソラは続けた。

「でも、物語には順序がある。これなしには、物語は前に進めない。そして、それは誰も破る事は出来ないし、してはいけない」

「…それがどうした？」

俺が聞き返すと、ソラはニッコリと笑った。

あ、何か嫌な予感する。

「だから、協力すると言っても、簡単には教えてあげられないんだ。反則は駄目。それは、全ての物語に通じるルールでしょ？」

そう言って、本を閉じる。

「「そ、そんなあ」」

俺と黒羽の情けない声が響く。

ソラの言い分は、確かに正論だが…。

知りたい内容を教えてもらえば、すぐにも物語は終わりそうなのに。

「…つまり、ヒントはやるが、後は自分たちでやりなさいってことね」

残念がる俺たちに、灰原の冷静な声が届いた。

「そういう事 うーん、お嬢さんは頭がいいね」

ソラは言った後に、軽くウィンクした。

「あら、止めてくれる？そういうの、嫌いだから」

「…あれ、そういう反応するの？」

まあ、あえなく灰原に突き放されたがな。

灰原にフラれたソラは、一度咳ばらいをし、気を取り直して説明を続ける。

「次に、僕の事について。気づいていると思うけど、僕は人の心が読める」

そうそう。人の心をのぞき見なんて、悪趣味だよな。

「あ、悪趣味……」

自分で言ってから、ソラが微妙に落ち込んだ。

「……………」

ま、勝手に読んだんだ。俺は、知らない。

ちよつとへこんだ後、涙目でソラは言った。

「グスンツ。つと、説明が遅れたね。後は…そうだな、自分の好きな所に瞬間移動できる。君たちの前に現れたのも、この力だよ」

そう言つて、ソラは実際に扉のところに瞬間移動してみたり帰つてきたりした。

それに黒羽が反応する。

「成る程ねえ。だから、いきなり姿を現したり消えたりできるわけだ。一体、どんなトリック使ったのかと思つたぜ。あんた凄いな」

「いやあ、それほどでも」

黒羽の称賛に、ソラは照れたように頭を撫でた。

そのまま、息が合ったのか黒羽とソラが和気あいあいと話し合い出した。

「『心が読める』『瞬間移動』…この時点で、もう普通の一般人じゃないわね」

「ああ。いや、まずあの本を持つてる時点で普通じゃないと思うぜ？」

「……そうね」

「だろ？」

その間、俺と灰原は小さくソラについてかなり酷い事を言っていた。

「…さっきから、何気に失礼だよ、君達」

が、ソラには聞こえていたみたいだ。

「あ、聞こえてた」

「聞こえてたって…いや、流石に聞こえるから」

何と、黒羽にもすっかり聞こえてたらしい。

二人とも地獄耳だな。

「全く…僕だって、好きでこうなったんじゃないやい。色々事情が…いや、これはこっちの話だった」

ソラは、そう一人ぼそぼそと何かを言うと、こっちを向いて言った。

「まあ、他にも色々あるけど、大事なものはこれくらいかな。さあ、他に何か質問は？」

「その心を読むっていうの、読めなく出来ないの？」

灰原が即座に聞く。

よっぽど嫌だったんだろうな。

まあ、人様の心を勝手に読むなんてプライバシーの侵害だ。

ずっとされていたら、こっちが落ち着かない。

そんな俺たちの気持ちを知ってか知らずか、ソラは飄々と言った。

「出来るよ」。僕が読みたいと思わなければ、大抵は読めない。まあ、例外はあるけどね。ただ、さっきみたいに時々、解除するの忘れるんだ」

「そんな大切なもん、忘れるなよ……」

ケラケラ笑うソラに、俺は呆れた視線を送った。

「はい」

ソラの話が終わった時、黒羽が真剣な顔で手を挙げた。

「何かな、黒羽君」

黒羽は、ソラの視線がこっちに向いたのを確認すると口を開いた。

「一つだけ。その話を聞いていて、ずっと疑問に思っていたんだが……」

そこまで言うと、黒羽はソラを見て続けた。

「何であんたは、俺たちに協力してくれるんだ？」

「……！」

「……………」

黙ってしまったソラに、黒羽は更に続ける。

「俺たちに協力しても、その不思議な本が終わるだけだ。それに危険も多い。なら、あんたには何のメリットもないぜ？」

確かに、それは俺も考えていた。

黒羽が言った通り、危険を冒してまで俺たちに協力しても、ソラ自体には何のメリットも無いように見える。

むしろ、危険に巻き込まれる分には、デメリットの方が強すぎる。

それなのに、何でわざわざ俺たちに協力するのか。

それとも、何かその本を終わらせなければならない、特別な理由があるのか。

ソラは、自分の事を読者と言い、あの本を大切にしている。

もしそうなら、危険を冒してまで、その本を完成させるわけとは？

黒羽の質問に、ソラはうーんと唸り、困った顔で言った。

「そうだねえ……。強いて言えば、僕はバッドエンドは嫌いなんだよ」

「何？」

聞き返す黒羽に、ソラはなお続ける。

「もし、このまま放っておいて君たちが死んだりなんかしたら、物語はバッドエンドに終わってしまう。それが…嫌なんだ。物語はハッピーエンドがいいだろう？」

「いや…そりゃそうだが…」

そう問い掛けたソラに対し、黒羽は言葉を濁す。

「ちょっといいかしら？」

そこへ、灰原が静かに言った。

「貴方、最後の物語が私たちと言ったわね。…それまでに、貴方が言うバッドエンドになった人たちは？」

「灰原？」

その灰原の質問に、ソラは一瞬笑っているが、どこか泣きそうな顔

になった。

「灰原さん、だったかな。…随分と、答えにくい質問をしてくれるね」

それから、また笑顔を作って答える。

「答えにくいなら、別に答えなくてもいいわよ。ただの興味だから」

「…お前なあ」

対する灰原は、あくまで冷静に言う。

そんな灰原に一つため息を着き、ソラは質問に答えた。

「…いたよ。いっぱい…死んだ。誰しもが、幸せになれるとは限らない」

「……………」

それは、重い言葉だった。

聞いた灰原はもちろん、俺たちも固まるほどに。

ソラは、そんな俺たちを真剣な顔で見つめて言った。

「だからこそ、僕は君たちにはハッピーエンドで終わってもらいたいんだ」

もう、バッドエンドは見たくない

小さく言うソラを、俺たちはただ見ていた。

ソラは一度黙り、それから力強く俺たちに言った。

「だから、僕に協力させてくれ。一緒にこの悪夢を、物語を終わらせよう！」

そのソラの言葉に、俺は顔を上げた。

隣にいる灰原も、しっかりと顔を上げている。

最後に、黒羽は組んでいた腕を外すと、ニッとシニカルな笑みを浮かべて言った。

「そうだな。やっぱ、物語はハッピーエンドじゃなきゃ！なあ、名探偵？」

「ああ。絶対に、バッドエンドにさせてたまるか」

「私も、黒い影に怯えて暮らすのはもうたくさんだわ」

三人が三人とも、それぞれ自分の決意を言う。

「みんなありがとう。……これで、僕の願いも叶う……」

ソラはさっきとは違って、とても嬉しそうに笑った。

「さてと…疲れただろう？今日は、もうこれでお終いにしようか。
なにせ、もう夜中の一時を回ってる」

不意にソラが言った。

その言葉に時計を見ると、確かに今は一時過ぎ。

あれから、一時間も経っていたのか…。

「ふああ…」

思わず小さく欠伸をすると、黒羽が何かニヤニヤとこつちを見てきた。

「そうだな。子供は、もうとっくに寝てる時間だし。なあ、探偵君
？」

「う、悪かったな！子供で」

いちいち言うなんて、ムカつく奴だな。

でも、流石にこの身体で夜更かしはキツイものがある。

しかも、緊張がとれた性が余計眠くなってきた…。

眠たそうに欠伸を零していると、灰原がみんなに言った。

「博士も心配しているだろうし、私は先に帰らせてもらっわ。それに…貴方、暫くは此処にいるんでしょ？」

聞かれたソラは、本を大事そうに持つと灰原に答える。

「うん。僕はそのつもりだよ。だから、いつでも来てね。」

「お前らなあ…此処俺の家だぞ。分かってんのか？」

まるで自分の家みたいに言うソラに、俺は半眼で言った。

それにソラは不満そうに言う。

「いいじゃん、別に…。どうせ使わないんだろっし。ね？」

「ね？って、確かにそうだけど…」

随分と、痛いところつくな…。

「じゃあ、いいよね？」

「はあ…しょうがねえな」

笑顔で言うソラに、結局俺は負けた。

「やった！てことだから、何かあったら聞きにおいで」

軽く言うソラにそう、とだけ呟いて背を向ける。

「じゃあ、また明日。おやすみなさい」

そう言うが早いか、振り返りもせず扉から出て行ってしまった。

「早いな…。あつという間にいなくなったよ」

灰原がいなくなった扉を見てみると、ソラが言った。

「さてと、僕は此処にいるとして。あ、黒羽君。君はどうするんだい？」

聞かれた黒羽はというと、ああと言って答えた。

「俺は大丈夫。寄るところがあるし、一先ず帰るわ。連絡については任せませ、ソラ。じゃあな！」

ポフンッ!!

「うわっ!!」

そう言うのが早いか、黒羽も煙幕を放って消えた。

「ゴホッ、ゴホッ、わざわざ煙幕使わなくてもいいのに…。ありやもう癖だな」

「ケホッ…そうだね。あ、工藤君」

ソラと一緒に黒羽がいたところを見てみると、ソラが言った。

「ん？どうした、ソラ」

振り返って見たソラは、真剣な顔をしていた。

「ソ、ラ？」

そのあまりに真剣な顔に、自分が緊張していくのが分かる。

「工藤君。君は、『真実を知る覚悟』があるかい？」

「…どういう意味だ？」

二人の間に、沈黙がおりた。

その沈黙は長いものだったか。それとも短かったのか。

少なくとも、俺にとっては長いものを感じた。

ソラは続ける。

「この先、どんなことがあっても、決して逃げ出さず、立ち向かい
…そして、知ってしまった真実を受け止める覚悟。…君には、それ
があるかい？」

「……………」

嘘は赦さないと言う風な、真剣なソラの顔。

そんなソラを見て、俺はしばし考える。

何故、ソラが今この質問をしてきたのか分からない。

ソラは、組織のメンバーを全て知っている。

まさか、そのうえでの質問なのか。

それとも、ただの確認か。

ソラはただ静かに、俺の答えを待っている。

俺は、俯いていた顔を上げた。

どちらにせよ、ソラの質問への答えは、もうすでに決まっている。

「ああ。あるぜ、その覚悟ってやつ。俺は…探偵だからな」

俺は、前に尊敬していたレイの犯行を暴いた。

一度は信じなかった。そんなはずはない、と。

だが、最後は服部の言う通りになった。

だから、暴いた真実をレイに告げた。

それが、己が探偵としてやらなければいけない事だったから。

それだけは、何があっても曲げてはいけない真実。

そんな俺の凜とした答えに、ソラは薄く微笑んだ。

「そうか…。やっぱり君は探偵だね。そして、君にはこの花が似合
うよ」

そして取り出して来たのは、一輪の花。

「あ！それ、カードと一緒に入ってたやつ。確か、竜胆だよな？」

暗号は解けたが、最後までその意味が分からなかった花だ。

「そう、竜胆の花。工藤君、君は竜胆の花言葉を知っているかい？」

ソラが、どこか楽しそうに聞いてくる。

「花言葉？えーと、確か…『悲しみにくれる貴方』じゃなかったっ
け」

随分と、皮肉った花をくれたもんだ。

俺がそう言つと、何が楽しいのかソラは面白そうに言った。

「そうだね。そういう意味もある。あの時は、君の言う意味で置いていったんだ。彼にもね。けど、今は違うよ。…花言葉ってね、色々あるんだよ」

「違う意味？」

確かに、花言葉には色々ある。

そして、一つの花に、数種類の花言葉があるなんてのはざらにある。

ソラが言っているのも、そのうちの一つだろう。

ならば、今の意味は何だ？

俺が目で先を促すと、ソラはゆっくりと言った。

「竜胆の花言葉。それは

『正義とともに』だよ。君にピッタリだね」

そのソラの言葉に、俺が何とも言えない顔をしたのは言うまでもない。

【読者の秘密！】（後書き）

如何でしたか？

あの竜胆の意味。

本文にもありましたが、花言葉って、色々あるんですよ。

これからも、少し使っていこうかなと考えておりますので、楽しみに。

次回は、翌日のお話です。

では、次回をお楽しみ〜

チシャネコ。

【不思議な観光！】（前書き）

さて、今回はあの話し合いの翌日のお話。

ここから、徐々に展開が早くなりま〜す！

…ついて来てね？

では、私の創る物語をお楽しみ下さい…

チシャネコ。

【不思議な観光！】

翌日。

俺は、いつもより少し遅い朝食をとっていた。

理由は簡単。

昨日寝た時刻が1時を過ぎていたため、寝過ごしたのだ。

博士も灰原も同じように寝過ごしたので、今はみんな揃って朝食を食べている。

そしてこいつも…。

「へえ…日本の朝食って、本当にご飯にみそ汁と焼き魚なんだね。」
うん、美味しい」

「あら、ありがとう」

ニコニコと、灰原が作った朝食を食べるソラ。

何でこんなにご機嫌なんだよ、こいつは。

その満面の笑みに呆れつつ、俺は出されていた魚をかじった。

今朝、寝ていた俺たちを起こしたのは、実はソラなのだ。

しかも理由が、『お腹がすいたから、何か作って欲しい』だ。

そんなもん、自分で何か作れ！と言っただが、作れないとか言って泣きついてきやがった。

で、結局こうしてみんなで朝食を囲んでるってわけだ。

ああ、博士には灰原が朝食を作っている間に一応ソラの事は話している。

まあ、いきなり朝知らない人が自分を起こしに来たのにはビックリしていたが。

黙々と自分の分を食べていると、唐突に灰原が言った。

「…貴方、箸使い綺麗なのね。誰かに習ったの？」

「そういえばそうじゃのう。日本語も上手じゃし」

博士と灰原に言われてから、はたと気づく。

確かに、ソラは見た目外人だ。

外人が、こんなにも完璧に使いこなしていたら不自然に思うのは道理。

あまりにも普通に使うから、全然気づかなかった…。

「ん？ああ、これ。昔、日本に来たときに女の人に拾われて。で、その時習ったんだ。イロイロ習ったけど、日本人って面白いよね。」

「イロイロ…」

一体、その時何を習ったのか。

無言のままソラを見てみると、再び博士が言った。

「ほう、そうじゃったのか。で、その教えてもらった人には、ちゃんと顔を見せに行っただじゃろうな？」

その問いには、首を横に振る。

「ううん、行ってないよ。…会いたいけどね」

ソラは明るく、しかし、どこか懐かしそうに言った。

そう。遠い遠い過去を懐かしむみたいに。

…何だ？今の顔。まるで、その人にもう会えないみたいだ。

その顔に、奇妙な違和感を覚えたが、すぐにソラの顔が元に戻ったことにより、その考えは消えていった。

そのまま何事もないように朝食が終わり、ちょっと一息ついた頃。

「ねえ、東京見学しない？」

ソラがいきなり、思い付いたように言った。

「はあ？東京見学？」

何で今更。

俺がそう言つと、ソラは頬膨らませて不満げに言った。

「だって、僕東京に来たの久しぶりなんだもの。久しぶりの東京を観光してみたいの！」

そう言つと、今度は目をキラキラさせてこっちを見てくる。

…まるで、お菓子を貰う前の子供みたいだな。

一つため息を吐き、半眼で言つてやる。

「観光つて…んなに行きたいのかよ。だったら、一人で行け。一人で。何処へでも行ける体質なんだろ」

「一人じゃ面白くないじゃないか！それに、どうせ暇なんだろ？だったら別にいいじゃないか。連れてつてよ！」

そう軽くあしらったら、速攻で反論された。

確かに、暇なのは暇だが…。

「あら、いいじゃない。行きましようよ。東京見学」

「は、灰原？」

朝食の片付けを終えた灰原が、珍しく口を挟んできた。

驚く俺に、灰原は何でもないように言う。

「読者さんが言う通り、私たちは今暇なのだし。それなら、昨日出来なかった気分転換に買い物に行きたいわ」

確かに、昨日はいきなり現れたこいつの性でせっかくのサッカーが気分転換にならなかった。

ソラも、その事は知っているのだろう。

ちよっと、苦笑いを浮かべている。

「そうじゃな。哀君もこう言ってる事じゃし、新一も気分転換に東京見学に行かんか？」

灰原の提案に、博士も乗り気になったみたいだ。

まあ、博士にしてみたら、灰原が久しぶりに外に出てくれるのが嬉しいのだろう。

さて…俺はどうするかな。

溜めていた小説は、一昨日全部読み終わっちまったし。

このまま此処にいても、暇だしなあ。

皆に、あんたはどうする？と言つ視線を向けられて、俺はついに観念した。

「…わーったよ。行くよ、東京見学。そのかわり、その服で行くのは辞めてくれよな」

流石に、こんな全身真っ黒で、いかにも怪しいって人を連れて歩きたくはない。

「そう？僕、この服気に入ってるのに。…これじゃ駄目？」

よっぽどその服が気に入ってるのか、上目使いしてくるソラ。

「お前な…駄目なもんは駄目」

「えー」

「『えー』じゃない。いいから早く着替えてこい！！」

ぶつくさ言うソラに、俺は今日一番の深いため息を吐いた。

「あ！僕、今時の服一着も持ってないや」

そのまま立ち去りかけたソラが、突然思い出した様に言った。

「はあ？お前、何で持ってないんだよ…」

脱力するよつに言う俺に、ソラはあっさりと言う。

「だって、必要なかったんだもの。しょうがないでしょ」

「…普通の服が必要ないなんて。貴方一体、どういう生活をしていたのよ？」

呆れ混じりに言う灰原に同情し、俺は面倒臭そうに言う。

「はぁ。もういいよ。俺の服着ていいから」

言った瞬間、灰原がきっぱり言う。

「それじゃ埃っぽいでしょ。それにしても、博士の服は合わないし…どうしましょつか」

「そうじゃのっ…」

「」「うーん」「」

考え込む三人。

ソラは着替えなくても済むかもしれない事から、顔をニコニコさせてこっちを見ている。

必死に考えるが、どうにも良い考えが浮かばない。

まずい。

最悪、このままの格好のソラを連れて行かなくてはならないかもしれない。

それは…嫌だ。

暫くうーんと考えていると、博士が思い付いたように言った。

「あ、そうじゃ。服を黒羽君に借りるといっつのはどうじゃろうか？」

「えっ？」

その場の全員が、黒羽？という顔をした。

博士の言葉を、真面目に考えてみる。

ああ、そういえばそうだな。

黒羽なら、今時の服とか当然持つてるだろう。

何で、今まで思い付かなかったんだろうか。

「そうだな。黒羽なら、背格好は似ているし、大丈夫なんじゃないか？」

「そうね。あのレトロな怪盗さんなら、色んな服持つてるだろうし。いいんじゃない？」

「じゃろっ？」

「え？え？？それじゃあ……」

そのまま、俺たちの間で話が順調に決まっっていく。

「てことで、今から黒羽に服借りて来い」

「えー！嫌〜！！」

俺が言った瞬間に、案の定ソラが反論する。

こいつは……！まだ反論するか。

その時、小さくぷっちん！って糸が切れる音がした。

灰原が、ゆっくりと顔をソラに向ける。

「……………ねえ。今、何て言ったの？読者さん」

びくっ！！

そして、顔はニッコリと笑って言ったら、目に見えてソラが怯えた。

そのまま、どこか泣きそうな顔になる。

「読者さん？」

「……………わ、分かったよ、借りてくればいいんでしょ！借りてくれば！だから、皆そんなに睨まないで……」

皆でジーッとソラを睨みつけたら、観念したのかソラはやっと了承した。

「まったく、世話のかかる奴だ。」

「じゃあ、服借りて来るよ……」

そう言うと、ソラはその場から消えた。

多分、黒羽のところにも行ったんだらう。

「さて……行く服に着替えたら、東京見学のコースでも決めるか。博士、灰原！一緒に考えようぜ」

ソラを見送り、灰原たちに向けてそう言う。

「分かった。じゃあ、わしは車を見てこようかのう」

「そうね。それじゃあ、私は支度をしてくるわ」

それに二人は頷いて、それぞれ部屋を出て行った。

「さてと…俺も行くか」

そう一人呟くと、俺も支度をするために部屋を出て行った。

「うわー、高いねえ！凄いね〜！！」

「……………子供か、お前は」

場所は、東都タワーの展望台。

黒羽に借りた服を着たソラを連れて、博士の車でやってきたわけだ。

「凄い反応だな…」

「そっね」

その呟きを聞いた灰原が、静かに同意する。

それから、自分が同意した相手を見て言った。

「…で、何で貴方が此処にいるのかしら？黒羽君」

「あ、あは？本当、何ででしょう…？」

全く、本当に何でいんだよ。

ソラが帰ってきたと思ったら、すっげー間抜け面したこいつも現れたんだ。

黒羽が言うには、何でも、いきなり現れて服貸してくれって言うてきたらしい。

それは、俺が行かしたわけだからまあ分かる。

問題はこの次だ。

少々自分の服を貸し、さっさと行けと不機嫌に言った黒羽にソラが一言。

『せっかくだから、黒羽君も一緒に行こうか』

『はっ』

で、手を掴まれたと思ったら気がついたら目の前に俺たちがいたらしい。

もちろん、すぐさま逃走をはかったがソラに連れ戻されて。

その結果、ソラによる東京見学ツアーに黒羽強制連行。

…何とも不憫な奴だ。

何だか疲れているような黒羽に同情の視線を送り、ソラに視線を戻す。

と…

「あれ？いない…」

「え？あ、本当だ」

いつの間にか、あんなに騒いでいたソラが消えていた。

周りを見渡しても、観光客の姿だけでソラの姿はない。

「…相変わらず、神出鬼没な奴だな」

ちょっと目を離れた途端に消えやがった。

「博士は、見てなかったの？」

灰原が隣にいた博士に聞く。

「すまんが、わしは見てないのう」

灰原の問いに、博士は首を振って答えた。

博士も見えてなかったのか…。

という事は、俺たちの内、誰もソラを見てなかったって事だ。

「ったく、何処行きやがったんだ？あいつは」

ため息を一つ着いていると、黒羽が何かを見つけたように外を指さした。

「…なあ、名探偵。あれ、ソラじゃねえか？」

いつ出したのか、手には小さな望遠鏡を持って外を見ている。

外…？あいつ、もう飽きたのかよ。

「はあ…で、何処だ？」

「ほら、あそこ。あの車んこの奴」

黒羽につられて、窓から外を見る。

眼鏡の機能でズームしてみると、確かにソラだ。

誰の車が、格好いいスポーツカーの近くにいる。

ただ黙って立っていると、まるでどこかの雑誌のモデルみたいだ。

あいつ、何で駐車場になんかにいるんだ？

と、こっちに気づいたのがニツコリ笑って何かを指差す。

「？何を指差してんだ？」

「あれじゃねえか？あのレトロな車」

黒羽が指差す方へ視線を移す。

そこには…。

「っ！？ポルシェ356A…！ジンの車…！」

「な、何じゃと…？」

「……………っ!!」

驚く灰原たちを余所に、全速力でエレベーターへと走る。

「し、新一!？」

「博士と灰原はそこを動くな!絶対だぞ!!」

何で奴らが此処に!?

何の目的で?

開いているエレベーターに、そのまま飛び乗る。

「あのレトロな車の持ち主、名探偵が追ってる奴のか?」

「く、黒羽!?!お前、いつの間にか?」

と、いつ乗ってきたのかエレベーターの中で、いきなり黒羽に話し掛けられた。

…ああ、そういや、こいつも神出鬼没を売りにしてる奴だったか。

黒羽はニツと不敵に笑うと、また聞いてきた。

「で？あの車の持ち主、名探偵たちに何か関係あるのか？」

「…何でそれを聞く？お前には関係ないだろ」

こいつは怪盗。

しかも、今回の場合はソラによってイレギュラーに参加させられている。

本来ならば、こうして一緒にいる方が可笑しい間柄なのだ。

なら、わざわざ俺たちの戦いに自分から首を突っ込まなくてもいいはず…。

そんな俺の考えが分かったのか、黒羽は苦笑いを浮かべて言った。

「確かに、俺とお前は本来敵同士。関係無いのは勿論の事、逆に関係を持つてはいけない…んなの、俺が一番よく分かってるよ。でも………何か、ほっとけねえんだよ」

「黒羽…」

思いがけない黒羽の言葉に、俺は絶句してしまった。

ほっとけない、だと？

何と言う…お人よしなんだろうか、こいつは。

俺たちの事情に巻き込まれ、それでも巻き込んだ張本人である俺たちを心配するとは。

そっぴや、前にカラクリ屋敷の時も俺たちを助けたよな。

確か、灰原が『ハートフルな泥棒さん』って言ってたっけ。

なんだかんだで、こいつは人助けが好きみたいだし。

「そつだよな…。こいつはこいつ奴だった」

「？」

真剣な黒羽に、ついに俺は負けた。

どうせ、ついて来るなど言っても、こいつは頑として聞かないだろう。

それより、放っておいたら勝手に調べそつだ。

なら、このままこいつに隠しても意味ないよな。

そつ思い直した俺は、黒羽を見上げ、小さく頷いて答えた。

「ああ、そつだよ。あの車の持ち主…ジンは、俺の身体を小さくした張本人さ」

それから、エレベーターが地上に着くまでの間、今までの経緯を簡単に話した。

幸いにして、エレベーターには俺たちの他には誰も乗ってなかったし。

「薬、か…成る程な。道理で、名探偵がいきなり小さくなったわけだ」

話を聞いた黒羽が、納得という表情で頷いた。

それに俺も頷き、先を続ける。

「ああ。その解毒剤を作るには、奴らの持っている薬、アポトキシン4869のデータを手に入れないといけないらしい…」

つまり、簡単に言うと俺たちの目的は二つ。

一つは、アポトキシン4869のデータを手に入れる事。

これは、元の身体に戻るためには必須の条件だ。

それから、二つ目が『奴らの組織をブツ潰す事』。

元の身体に戻っても、奴らを潰さない限りまた命を狙われる。

それだけではない。

ただ探偵として、奴らの行いが許せないのだ。

何を目的にしているのかは分からないが、手段は問わず平気で人を殺す彼ら。

灰原のお姉さんも、奴らに殺された。

あの時の灰原のあの悲痛な泣き声は、今でも覚えている。

だから、絶対に俺が奴らを全員監獄にぶち込んでやる！

これが、俺たちの目的だ。

「そうか…なら…」

話が終わると、黒羽は組んでいた腕を外して俺に向いた。

それから、どこか力強く言う。

「だったら、俺の力は必要だな。これも何かの縁だ。協力するぜ、名探偵！」

そう言って不敵に微笑む黒羽に、俺は悔しく思いながらも言った。

「黒羽……頼む。だが、分かっているとは思って…」

そこまで俺が言うと、黒羽は頭の後ろで両手を組んで言った。

「はいはい。これが終われば俺たちはまた敵同士だ、だろ？ いいじやねえか。調度スリルが足りなかったんだ。無事に復活したら、バトルしようぜ…工藤新一君？」

夜の雰囲気を漂わせる黒羽…いや、これは 怪盗キッド。

そこには、確保不能と言われた、あの世紀の大怪盗がいた。

その雰囲気に吞まれないよう、俺も、本来の工藤新一として返す。

「ふんつ。その言葉、後で後悔するなよ？ 絶対に監獄にぶち込んでやるから、覚悟しろ！」

二人がお互いにお互いを認め合った瞬間、やっとエレベーターが地上に着いた。

【不思議な観光！】（後書き）

せっかくだから東京見学」という事で、はい。

コナン達、強制観光へ。

楽しんでもらえましたかな？

一番楽しんでるのは、私でしょうか

これから、舞台は東都タワーに変更となります。

まあ、初心者が描く物語なので、細かい点は気にしないで下さいね？

次回もお楽しみに！

チシャネコでした。

【捜査開始！】（前書き）

さて、お次からは黒の組織が入ってきます

どうなる事やら…

では、私が創る物語をお楽しみ下さい…

チシャネコ。

【捜査開始！】

エレベーターを出て、駐車場まで走る。

と、俺たちを視界に入れたらしいソラは、にこやかにこっちに手を振ってきた。

この野郎…！

息を切らしながら走る俺の隣で、黒羽がボソツと言った。

「…あの野郎、一発殴っていいか？」

どうやら黒羽も、ソラの呑気な姿にムカついたらしい。

「ああ。ついでに、俺の分も殴つといてくれ」

それに俺も半眼のまま同意すると、ソラ向けて走って行った。

「やあ、黒羽君、工藤君。随分と速かったね。後、僕を殴るのは止めてね。僕、痛いのは嫌いなんだ」

ソラはそう言って、息を切らしている俺たちに笑いかけた。

「はあはあ……たく、呑気なもんだな」

ソラに思考を読まれた黒羽は、殴る気を失くしたのか脱力して言った。

「だって、僕はあの人たちに面識ないもの。見つかって困ることないし。どちらかといえば、見つかって困るのは君かな？」

そう言って、黒羽を指差す。

「え、俺？」

「何で黒羽が……ってああ、成る程な。確かにやばい」

困惑する黒羽を見て、俺は理由が分かった。

普段一般人な黒羽と奴らとは、当然面識などない。

なのに、何故困るのか。

その答えは、簡単。

この場合、問題なのはこいつの『顔』だ。

黒羽の顔は、…言いつらいが、俺の 工藤新一の顔にそっくりなのだ。

おまけに、声まで似てやがる。

髪型を直せば、まさにドツペルゲンガーと言っても通じるんじゃないか、て程に。

最初、ソラがこいつを連れて現れた時、灰原と博士がえらく驚いたもんな。

これが素颜だと分かった時の、あの灰原の呆れたような言葉。

『貴方たち、本当にそっくりなのね。…見た目だけじゃなく、中身も』

お互い同い年で、こんな普通じゃないものを背負ってる。

そんな高校生はいないだろう、という灰原の言葉に、二人で沈黙したのは言うまでもない。

黒羽も、その時の事を思い出したのだろう。

「成る程。俺はそんなに思ってないが、世間から見りゃそう見えるってか。それなら……」

と、黒羽が何処から出てきたのか大きめの布を身体の前でバサッと広げ、一瞬姿を隠す。

「これならいいでしょ？」

「「!!」「」

布を取り去った時、中から現れたのはツインテールの可愛い女の子。

いつの間に着替えたのか、服まで変わってやがる。

今の黒羽は、綺麗な花柄のワンピースを着ている。

…何処にそんなもん持ってたんだよ、お前は。

呆れたような視線を送る俺に対し、ソラは感心したように黒羽を見る。

「へえ…。流石、世紀の大怪盗って言われるだけあるね。お見事！」

「いやあ、それほども」

褒められた黒羽は、声色まで変えてノリノリである。

それを横目で見つつ、ジンの車に近づいていく。

「ちとと…おい、黒羽！」

「何？名探偵？」

「ご機嫌に歩いてくる黒羽に、車を指差して一言。

「開ける」

「…それって犯罪なんじゃ？それに、俺は別に鍵屋じゃないんだけど？」

若干呆れたような黒羽に対し、澄まして言う。

「犯罪捜査の為だから、仕方ない。それに、お前こそいつもやってくるくせに、今更何を言う。ほら、さっさとやりやがれ」

鍵開けなんて、お前にとっちゃおてのものだろが。

「はいはい、分かりましたよ。我が儘なお姫様の御命令、聞きましたよっ？」

「誰が姫だ！誰が！！」

黒羽に怒る俺に、ソラが笑いながら口を挟む。

「あはは、確かにこの姿の工藤君って可愛いよねっ」

初めてこの姿で会った時、蘭にも同じ事言われたが…。

こいつらに言われると、何だか…腹立つな。

まだ笑っている黒羽とソラを見て、後で覚えてるよと心の中で思った。

黒羽に鍵を開けてもらい、助手席のシートの下に発信器と盗聴器を慎重につける。

その際、黒羽も自分のものを見つかりにくいところに仕掛けていた。

「よし、これでいい」

前に取り付けたものはばれてしまったが、今回は俺のものと黒羽のもの二つだ。

ならば、最悪どちらかが残るだろう。

「用事が終わったんなら、早く行こうぜ。この車の持ち主が帰ってきちまう」

「そりゃ大変だ」

きちんと鍵をかけ直して、その場を離れる。

もたもたしていて、鉢合わせなどしたくはない。

灰原たちが待つ展望台へと歩いて行く。

「後は待つだけだな」

「そうだな。念のため、此処から離れた方がいいだろう」

奴らが此処にいる目的が何なのか分からない今、俺たちに来る事はない。

「じゃあ、早く観光の続きをしよう　ちょうど用事も終わった事だしね」

そんな呑気な事を言ったソラを、黒羽が無言でしばいた。

その瞬間、痛そうなお音とつめき声が聞こえたが、気にしないでおう。

自業自得だ。

展望台へと上るエレベーターを、今度は三人で乗る。

ちなみに黒羽はまだ、女の子に変装したままだ。

ソラと一緒に歩いていると、どこかお似合いのカップルみたいに見える。

三人で並ぶと、俺が二人の子供みたいだ。

だが、そんなほのぼのな感じとは裏腹に、今の二人は見るからに険悪な雰囲気だ。

何故か。

「あんなに強く叩かなくてもいいじゃないか！凄く痛かったよ!？」

「それは、あんたが変な事言ったからでしょうが！」

さっき無言でしばいた事に対し、ソラが黒羽に猛抗議し、それに対して黒羽が同じく猛反論をしていたから。

…何やってんだか。

そんな仲の良い二人は置いて、これからについて考える。

博士は何かごまかせるとして、問題なのは…。

「灰原に何て言おうか…」

ジンの車に盗聴器と発信器をつけたって言ったなら、絶対怒るだろうし。

かといって嘘をついても、すぐ見破られる。

このまま灰原と一緒に捜査するのは危険過ぎる。

奴らは灰原を　裏切り者であるシェリーを追っているのだから。

だが、ちゃんと説明しないと、そのまま素直に帰ってはくれないだろう。

どうすっかな…。

「って、いい加減喧嘩は止めてお前らも少しは考えるよ…！」

考えてる間中ずっと騒ぐ二人に、とうとう俺は怒鳴った。

すると、二人してこっちを向いてさらりと言った。

「んなの、着いてから決めりゃいいじゃねえか」

「そうそう。もしかしたら、君が思ってる通りに行くかもしれないしね」

揃って同じような事を言う二人に対し、つい半眼で見てしまった。

…お前ら、さっきまで喧嘩してたんじゃないか。

そんな俺を見て、ソラが笑って言う。

「工藤君。今、君がそんなに悩む必要はないよ？だって、物語はもう、すでに進み始めているのだから……」

それを聞き返す前に、エレベーターの扉が開いた。

「おお、新一。良かった、無事に戻ってきてくれて」

「博士？それに灰原！」

エレベーター前には、灰原と博士が立っていた。

どうやら、帰りの遅い俺たちを心配して追いかけてようとしたらしい。

…そんなに長いをしたわけじゃないのにな。

といっても、行きと違い、帰りは三人で歩いて来たから遅かったの
だろう。

「それで？何か分かったの？」

灰原が、いつものCoolな顔で聞いてきた。

ほらきた！

予想通りの灰原の質問に、黒羽たちを見やる。

さあ、黒羽たちはどう答えるんだ？

何も言わない俺達に、訝しげにこっちを見る灰原。

「…どうなの？」

「そ、それは…」

黒羽たちは、沈黙したままだ。

この野郎！何か言えよ！！

言葉に出せない分、黒羽をきつく睨むが黒羽はへらへら笑ってるだけだ。

だがその瞳は、どこか焦っているようにも見える。

っ！まさか考えてないとか…。

そんな俺の不安げな視線を受け、黒羽はやっと口を開いた。

「分かったって言ったら分かったし、分かってないって言ったら分かってない。いわば、そんな感じ？」

そのやつとこさ出た言葉は、ある意味考えていたものと違っていたが。

「「……はあ？」

当然、灰原たちは分からないといった顔で言った。

それにソラが、助け舟を出すように言う。

「まあ、詳しい話は移動しながらにしようよ。君は、あの車の持ち主に見つかったらマズイんだろ？」

「そ、そうじゃな。哀君も奴らに見つかったらマズイしいう。話は

後にしよう」

それに博士が乗って来て、一同はその場から移動することになった。

「…後で詳しく聞くから」

そう言うと、灰原は俺達を睨んだ後に博士に続いてエレベーターに乗り込んだ。

「ははは…」

早く言えよ、というその気持ちはよく解るが怖えよ。

苦笑いをしながら、俺達もその後が続いて再びエレベーターに乗り込んだ。

地上に着くと、みんな無言で博士の車へと足早に向かう。

その途中で、先頭を歩いていたソラがいきなり立ち止まった。

「ソラ？」

今度は何だ？

いきなり立ち止まったソラに不審そうに言つと、ソラはにっこり笑
い一言。

「あれ。あれが食べたい」

そう言つて、何かを指差す。

「『あれ』？」

ソラが指差す先には、ソフトクリーム屋が。

店の看板だろうか、可愛いウサギが満面の笑みでソフトクリームを
持っている。

「……………」

そして、ソラも目を輝かせてこっちを見ていた。

店からソラに顔を戻し、一言。

「却下」

「え”え”くっ!?嫌だー!食べたいくっ!!」

瞬間、人の目を気にせず大声で叫ぶソラ。

「うわっ!ソラ君、落ち着いて…」

「いやー!三段アイスー!バニラのソフトクリームくっ!!」

「あ、普通のバニラソフトなんだ?」

「……………」

騒ぐソラを落ち着かせようとする博士に、変なとこに突っ込む黒羽。

灰原に至っては、呆れて声も出ないらしい。

ああ、誰かこの脳天気野郎をどうにかしてくれ…。

頭が痛くなった俺だった。

結局、食い意地の張ったソラに負けて博士と黒羽がアイスを買いに行くことになった。

「じゃあ買ってくるから、そこで待ってるよ?」

「行ってらっしゃい」

残された俺たちは、とりあえず近くのベンチに座る。

「」

うきうきでアイスを待つソラを見て、灰原が言った。

「貴方、姿は大人なのに中身は子供みたいなのね。…何処かの誰かさんと違って」

そう言いながら、こっちを見る灰原に苦笑いを返す。

「お前な…。俺がそうなら、お前もだろっが」

呆れたように言う俺の隣で、ソラが笑って言った。

「あはは！それは一理あるね。だって、君たち二人とも子供っぽくないもの」

「……………」

えらくきっぱりと言うソラに、俺たち二人は黙ってしまった。

自覚しているけど、そんなにはっきり言わなくても…。

黙ってしまった俺たちを余所に、ソラはただ笑い続ける。

いい加減怒ろうかと思った時、不意に笑いを止め、ソラは小さく呟いた。

「子供っぽいか…。クスッ。初めてだな、そう言われるの」

「…ソラ？」

一瞬見えたソラの顔は、笑ってはいるが、切なさを含んだ何とも悲しい表情だった。

…まただ。

ソラは、明るかったかと思えば不意にこんな顔をする。

まるで、遠い遠い昔を思い出すかのようじ。

小さい頃に何かあったのか？

ソラは見たところ25歳前後だから、遠いと言っても5歳くらいのはず…。

「そういえば、ソラは何歳なんだ？」

推測だけで、きちんとソラに聞いたことはなかった。

そして、よく考えてみたら、俺はソラについて何も知らない。

いきなり現れたソラを、一応は信用している。

だが、そのソラにも、何か深い理由がありそうだ。

今はまた無邪気に黒羽たちを待つソラを見て、俺は自分の思考に落ちていった。

暫くして、黒羽たちがソフトクリームを持って帰ってきた。

「お帰り〜!」

それに真っ先に反応したのは、やっぱりソラだった。

ソフトクリームを持った黒羽に飛びつく勢いで走っていく。

「うわっ!ソラ、危ない!!」

突進してくるソラを器用に避け、黒羽は華麗に一回転する。

見た目が女の子のままなので、妙にその動きが似合っていた。

そして黒羽に避けられて、目に見えて落ち込むソラ。

例えるなら、しゅーんと耳と尻尾が垂れてる感じ。

お前な…。

それには黒羽も驚いたようで、ばつの悪い顔をしている。

今はソラが悪いのに、何か気の毒な奴だな。

今だにしょげているソラ。

「悪いい、ついな」

そんなソラに、黒羽は気まずそうに言った。

それからソラに向かって、ソフトクリームを差し出す。

「お待たせ。はい、御望みのバナラソフトクリーム」

「うわぁーい」

ソフトクリームを渡した瞬間、ソラの顔が輝き、機嫌が一気に直った。

それから、嬉しそうにソフトクリームを頬張る。

「本当に子供ね…」

「ははは…」

その様子を、見た目子供の俺たちが冷めた目で見ていた。

「ほれ、新一はバニラ。哀君は抹茶じゃったな」

「サンキュー！」

「ありがとう、博士」

博士から、自分たちの分を買った俺たちもソフトクリームを食べる。

ふと顔を上げると、ソラが黒羽のチョコを食べようとして黒羽を追いかけているのが見えた。

「そつちも食べたい〜！ちょっと食べらして〜！！」

「嫌だね！さっき見てたけど、あなたの一口大きいもん！！俺の分が無くなる！」

確かにソラの一口は大きかったが、そんなに頑張っただけで逃げなくても…。

「ああ！ソフトクリームが溶ける〜！！！」

…何だか、和やか過ぎて当初の目的を忘れそうだ。

のんびりと、その追いかけてこを眺めていると。

《………つたく、ジンの兄貴は人使いが荒いぜ……》

耳に付けていたイヤホンから、聞き覚えのある声が流れた。

「っ！奴らが戻ってきた！！」

急に聞こえてきた声に、一気に緊張する。

「状況は？」

真剣な俺の声で、黒羽たちも走り回るのを止めこっちに来た。

黒羽の問いで、再び耳に神経を集中させる。

「…まだ車の中だ。この声は、多分ウォッカか？ジンの声は、まだ聞こえないな。だが、盗聴器に気づいてないらしい」

そのまま暫く聞いていると、どうやら今はウォッカだけでジンはいないらしい。

少々の愚痴と共に、ライターをつける音がしたから煙草でも吸っているのだろう。

それにしても、危なかった。

ソラがソフトクリームが食べたいと言い出さなかったら、ウォッカと鉢合わせするところだった。

そんなことになったら、いくら白を切っても逃げきれない。

もしかして、この為に業と…？

黒羽の隣で、呑気にソフトクリームを食べるソラを軽く睨む。

「ん〜何かな？いくら見つめても、このソフトクリームはあげないよ？」

俺の視線に気づくと、ソラは軽く笑って言った。

だが、笑ってる反面、目が真剣だった。

…やっぱり、この為にソフトクリームが食べたいなんて言い出したんだろ？。

何処までも食えない奴だ。

黒羽も、自分のイヤホンをつける。

ウオツカの話によると、ジンとは別行動していたらしく、車で待ち合わせみたいだ。

「てことは、近くにジンがいるかもしれないって事か」

とにかく、これでジンの所在が分かるまで当分此处から動けない。

下手に動いて、ジンと鉢合わせは御免だ。

一応、灰原には変装にと俺が被っていた帽子を渡す。

帽子を渡した際の灰原は、奴らの存在に見るからに怯えた表情をしていた。

「大丈夫じゃよ、哀君。まだ奴らに見つかりはせん」

怯えている灰原を気遣う博士。

さっきまでの和やかな雰囲気は一変し、今では痛いぐらいの緊張感に包まれている。

「そついえば…」

そんな雰囲気の中、不意に一つの疑問が浮かんできた。

「何で奴らは、東都タワーに来てたんだ？」

もしかして、また誰かを殺すつもりなのか？

だが、それにしても、ウオツカを連れていかずにジンが一人で別行動している。

これには、何の意味が…？

そこまで考えた時、不意にウオツカが言った。

《それにしても、兄貴遅えな。奴との交渉、上手く行ってねえのか？あいつ結構、用心深いからな…》

奴…？

「奴って誰だ？」

黒羽もそう思ったのか、俺と同じようにイヤホンから流れてくる声に集中する。

盗聴器に気づかないウオツカは、そのまま一人話していく。

《こんな手間がかかるなら、西森の奴にやらすんじゃなかったぜ。まあ、奴もたまたま出した『神様のゲーム』で一気に有名になっちゃったからしょうがねえか》

西森…誰だ？

ゲームに関しては、苦手な為あまり知らない。

「おい、『神様のゲーム』を作った西森って知ってるか？」

それには黒羽が答えた。

「西森…あ、最近有名になったゲームプログラマーにいたな。確か西森洋一っていったか」

「ゲームプログラマー、か」

確か、前にもそんな事があったな。

その時は、結局奴らに奪われてしまったが。

ゲームプログラマーに、一体何を作らせているんだ…？

【捜査開始！】（後書き）

今回は、ウォツカ登場です。

話し口調などは、原作を見ながら描いているので、あまり違和感ないと思うのですが…どうでしょうね？

私の中での謎なキャラです。

さて、次回はもっと内容を濃くしていかなければ…！！

では、次回をお楽しみに！

チシャネコでした。

【皆で謎解き！】（前書き）

はい、チシャネコです。

今回は、皆で謎解き！ということぞで。

簡単だから、すぐ分かるかも。

推理してみてね。

では、私の創る物語をお楽しみ下さい…

チシャネコ。

【皆で謎解き！】

ウオッカの話は続く。

《全く、奴も考えたものだけ。この東都タワーに、例の物を隠すなんてな。おかげで探し回る羽目になった》

苛立ち混じりの声から、相当疲れたのだろう事が分かる。

この広い東都タワーから探すのは、大変だろうな…。

《たく、ふざけやがって。ゲームにちなんで、ヒントは『神々を斬り倒す』だなんてな》

「神々を斬り倒す…?」

おいおい、神様を倒すのかよ。

普通、倒すのは悪魔だろうが。

それって一体、どんなゲームだよ…。

「あー成る程ね。それでか」

と、それを聞いていた黒羽が納得したように頷いた。

「貴方、そのゲームの事知ってるの？」

納得するように頷く黒羽に、不思議そうに聞く灰原。

「ああ。だって俺、そのゲーム持ってるからさ」

顔を灰原に向け、黒羽はあっさりと答えた。

やっぱり若者に人気なだけあって、黒羽も持っていたらしい。

「…そういえば、小嶋君たちが欲しがっていたわね。そのゲーム」

「そうだったけ？」

持っていないのは、ゲームに興味がない奴か金のないやつぐらいだ。

まあ、俺の場合はゲームより小説を買うがな。

「ふーん。で、どんなゲームなんだ？」

その問いに、黒羽はゲームの説明を شدした。

「神様のゲームつつつたら、神様がゲームと称して仕掛けた戦に、主人公が奮闘して神様たちを倒すってRPGゲームなんだよ。ただ戦うだけじゃなくて、戦略とか罫とかで頭も使うんだ。あのラスボスがめっちゃ強くて、苦労したな」

「へえ…面白そうだな」

成る程。そんなゲームなら、今の若者たちに人気が出るのも頷ける。

何だか、俺もやってみたくなった。

ウオツカはまだぶつぶつと何かを呟いているが、小さすぎて聞き取れない。

「どつやら、例の物とやらは奴ら見つけてないみたいだな」

「ああ。だが、奴らより先に見つけるにしても、何かもう少しヒントがないと…」

分かったのは、『神々を斬り倒す』というヒントだけだ。

これだけの情報では、奴らと同じで東都タワー中を探しまわらなければならなくなる。

隣を見ると、黒羽も難しそうな顔をして何やら呟いていた。

「…神々を切り倒す…神…キャラクターの名前が関係してんのか？
だとしたら、一体どいつだ…？」

そう言って、指を一本ずつ折りながらまた考え込む。

「そんなに、神様キャラ多いのかよ？」

どんどん指を折っていく黒羽に、よく覚えてるなと呆れ半分聞いてみた。

「…スカリエット…ん？ああ、多いぜ。全員で56人。主要キャラ
だけだと…この6人くらいかな」

そう言って、どこから出したのか、主要キャラの名前と特徴を書いた紙を渡してきた。

「…随分と用意が良いわね」

「確かに」

いつ書く時間があったんだよ、こんなもん。

そう言う灰原に同感しつつ、中身の確認をする。

クラウド…男。

役職 大刀使い。

特技 剣技。

性格 天然一途。

リオン…女。

役職 ナイフ使い。

特技 戦略。

性格 Coolで冷血。

ジューダス…男。

役職 格闘家。

特技 武術。
性格 短気で熱血。

アリアス：女。
役職 調教師。
特技 鞭。
性格 女王様気質。

ハロルド：男。
役職 魔法使い。
特技 魔法。
性格 変人のマッド。

スカリエット：女。
役職 神。
特技 主に槍術。その他あり。性格 思慮深い。

「神に剣士にナイフ使い、格闘家に魔法使いは分かるが…調教師？」
元凶である神がいるのは当たり前だが、…何故に調教師？

つい書いた黒羽を睨むが、黒羽は苦笑して答えた。

「…俺の性じゃねえぞ？このキャラは、もともといたんだからな」

… 一体、何の為にいるんだか。

「ヒントは『斬り倒す』だから、簡単に考えてクラウドじゃないかしらっ。」

「じゃが、哀君。リオンもナイフ使いじゃから、斬り倒す事は出来るんじゃないかのう？」

考え込む俺を余所に、色々意見を言う灰原たち。

まあ、剣士とナイフ使いなら妥当な線だろう。

しかし、東都タワーとの関連がイマイチだ。

… 本当に、役職が関係しているのか？

疑問に思っ、もう一度紙を見る。

『剣士』に『ナイフ使い』、『格闘家』に『調教師』に『魔法使い』と元凶である『神』か。

で、例の物の隠し場所のヒントは『神々を斬り倒す』。

やっぱりこれだけのヒントじゃ、そう大したことは分からねえな…。

考えていると、灰原が何かに気づいたように紙を指差した。

「ちょっと、黒羽君。スカリエットの特技のところに『その他あり』って書いてあるけど、その他って?」

それに黒羽は、苦笑しつつ答える。

「ああ、スカリエットには一応『槍術』って書いてるけど、本当は違うんだ。なんせ、スカリエットは神だから、槍術の他に剣技や魔法、その他諸々が出来る最強キャラなんだよ」

「成る程。神様だけに万能キャラってことか」

これで候補は、『クラウド』・『リオン』・『スカリエット』の三人か。

と、ウオツカの携帯が鳴った。

《ん？兄貴からだ》

ジンからの電話ー！

すぐさま考えるのを中断して、イヤホンに集中する。

《…ええ、はい。今、東都タワーの駐車場に…えっ？奴が逃げた！
？》

流石にジンの声は聞こえないが、ウオッカの焦ったような声が車内に響く。

「…どうやら、西森さんはジンたちから逃げ出したみたいだな。けど、これじゃあ…」

「このままじゃ、奴らより先に『例の物』を取りに行けないよな」

「…情報が少な過ぎるわね」

西森さんが奴らから逃げ出したのはいいが、それでは『例の物』への情報が足りない。

それは奴らも同じらしく、ウオッカの慌てた声が聞こえた。

《じ、じゃあ例の物の在りかは…はい、はい。…は？またヒントで
すかい？》

「あー、またヒントかよー！ややこしいー！」

「…流石、ゲームプログラマーなだけあるわね。しっかりゲームの
宣伝してるわ」

ヒントという言葉聞いて、黒羽は頭を掻き、灰原は感心したよう
に言った。

灰原の感心したような言葉に、ソラも乗る。

「うんうん。自分の命が危ないつてのに、まだ自慢のゲームをネタ
に暗号を作るなんて、流石だよな」

「…褒めていいのか？そこ」

ソラの言葉に、つつい突っ込んでしまった俺だった。

そんな間にも、ジンとウオツカの会話は続く。

《…はい…はい。えっと、ヒントは『炎と水と白』ですかい？はい…ええ…分かりました。こっちも考えてみます。じゃあ、また後で…》

そこで、ジンとの電話は途切れた。

《『炎と水と白』…？あの野郎、また面倒な事しやがって…》

車内で、ウオツカが愚痴を言いながら必死に考えている声が聞こえる。

そこまで聞いて、俺はイヤホンから意識を灰原たちに向けた。

「うーん。炎とか水なら、魔法でよく使うんだけど…」

「なら、魔法使いの『ハロルド』じゃよ！」

ボソツと呟く黒羽に、博士が勢いよく言う。

「でも、それなら最初のヒントにある『神々を斬り倒す』はどうなるの？」

「魔法使いじゃ、斬り倒せねえだろ」

「む、むう……。そうじゃな」

しかし、その考えも灰原と俺に一蹴されてしまい再びみんな考え込む。

『神々を斬り倒す』

『炎と水と白』

…また、ややこしくなってきたな。

あーだ、こーだと意見を言うのが結局分からず。

それぞれが考えていると、ふいに黒羽が言った。

「…ここで考えててもしょうがねえ。なら、東都タワーにもう一度行ってみねえ？その方が何か分かるかもよ？」

「……………そうだな。黒羽の意見も一理あるし。とりあえずもう一回

行ってみるか」

「賛成」 僕、もう一回行きたかったんだ」

「全く、貴方ね。遊びじゃないのよ？」

「まあまあ」

これには皆も賛成し、もう一度東都タワーに行く事になった。

「全員行ってもしょうがない。ここは、俺と黒羽とソラが東都タワーへ向かう。で、灰原と博士は車に……」

「嫌よ。私も一緒に行くわ」

「あ、哀君!？」 「灰原!？」

焦る俺と博士を真剣な顔で見遣り、灰原は静かに言う。

「…吉田さんたちから学んだの。いつまでも、逃げてばかりじゃないって。だから…私も一緒に行くわ」

「哀君…」

「灰原、お前…」

そんな灰原の決意に啞然とする俺たちに気づかれないよう、ソラが小さく笑った。

皆が沈黙していると、ソラが笑いながら言った。

「別にいいんじゃないの？一緒に行ってもさ」

「そ、ソラ君!？」

驚くような博士に、ソラは笑顔を絶やさずに続ける。

「だって、本人が行きたがってるんだよ？なら、いいじゃない。それに、何かあっても工藤君達を守るんだし」

「そりゃ…そうだけど」

「いやいや、俺たちだけじゃなくてお前も守れよ!」

絶対の自信で言うソラに思わず流されたが、すぐに黒羽が突っ込む。

一方の突っ込まれたソラはというと、にんまりという表現が合うように笑って言った。

「ええ、守るのって苦手なんだよ。僕には管轄外。というか、この流れだと哀ちゃんが行くのは決定だよな？」

「そうね。言った通り、守ってもらおうかしら」

「「あ……」

「やられた……」。

「それじゃ、お願いするわね。自分で言ったんだもの。文句なんてないでしょう?」

呆然とする俺たちに、灰原も笑顔でそう言ってきた。

「……………ああもう!」

「はあ…分かったよ。その代わり、俺か黒羽から絶対離れるんじゃないぞ」

「ええ」

結局、東都タワーへ灰原も一緒に連れていく事になった。

周りに注意しながら東都タワーにやって来た一行。

ちなみに気配に敏感な黒羽を先頭に、博士 灰原 俺 ソラの順だ。

「ねえ、小さな探偵君 今、気づいた事があるんだけど、いいかな？」

「ああ、奇遇だな。俺も今気づいた」

「成る程のう」

「…だから、あんなヒントなのね」

再び東都タワーに入った俺たちの目に飛び込んできたもの。

それは…

「今日は西森洋一の『神様のゲーム』記念だ！主役級のキャラクタータ
ーのお店もオープンしているぞ！皆さん、楽しんで下さい！！」

張り切った司会者の声が、東都タワーに響いている。

「これで、この中のどれかにあるってのが分かったな」

何処からか、ちゃっかり貰ったパンフレットを見て言う黒羽。

ほいつ、と渡されたパンフレットを俺も見る。

玩具屋『クラウド』

本屋『リオン』

スポーツ店『ジューダス』

ペットショップ『アリアス』

薬品店『ハロルド』

美容室『スカリエット』

…神様なのに美容室なんだ。

それを見た瞬間、そんな感想を持った俺だった。

「…とりあえず、この中のどれかに『例の物』があるみたいだし？
一応、一回全部の店を回った方がいいんじゃない？」

同じく、黒羽からパンフレットを貰った灰原が地図を見ながら言った。

確かに、その方がいいかもしれないが…。

「…やっぱり、一つに絞った方がいいと俺は思う」

灰原の言う事も一理あるが、全部回っているうちに奴らと鉢合わせになる可能性がある。

灰原の事を考えると、そんなに時間は掛けられねえ。

「そうだな。奴らだって、全部の店を回ったんだ。それでも見つからないとなると…もしかして何か合言葉があるんじゃないか？」

「合言葉…か」

今なお、奴らから逃げている西森さん。

西森さんにとって、ヒントは逃げる為の囿なのだろう。

そして、黒羽の言う通りヒントを出しながら逃げている事から、合言葉の可能性は高い。

…ただ探すだけじゃ駄目ってことか。

厄介だな。

合言葉の可能性が出てきた事で、皆がそれぞれ何か考える。

そんな中、灰原が情報を整理するようにはつりと言った。

「……情報が少な過ぎるわね。今分かっているのは、奴らがゲームプログラマーの西森洋一さんに造らせた『例の物』を探しているということ。そして、ヒントが二つ」

「確か『神々を斬り倒す』と『炎と水と白』じゃったかのう」

それに博士が答える。

「そして、その『例の物』を隠している可能性があるのは、今のところ玩具屋『クラウド』、本屋『リオン』、薬品店『ハロルド』、最後に美容室『スカリエット』の四つだな」

「ここから一番近いのは、玩具屋『クラウド』。で、一番遠いのは美容室『スカリエット』だね。どうする？小さな探偵君」

最後にソラが楽しそうに言って、俺の方を向いた。

こいつ、いつも楽しそうだな。

呆れたようにソラを見てみると、目の前を一組の親子連れの会話が耳に入った。

「ママー、かみきつたらあたしもとかわいくなるかな？」

「ええ。真美ちゃんは今でも可愛いけど、短い方が似合うわ」

「ほんとうっ？じゃあ、あたしかみいっぱいきるー！」

「うん！じゃあ、早く可愛くなりに行こっか」

どこにでもある、他愛ない親子の会話。

だが、どこか引っ掛かりを覚えた。

何だ？何が引っ掛かる？

そういえば、さっきの女の子何かイントネーションが違っていた…。

待てよ？『髪をいっぱい切りに行く』？

もう一度、ヒントを最初から考えてみる。

神々を斬り倒す…炎と水と白…はっ、まさか！

「どづしたんじゃ、新一？」

俺の様子に気づいた博士が、不思議そうに聞いてきた。

「成る程な。それで、あのヒントなわけだ」

「西森さんの性格を考えると、俺には合言葉も何となく想像がついたぜ」

黒羽もさっきの会話を聞いていたようで、答えがわかったみたいだ。

やっぱり怪盗やってるだけあって、頭の回転が速いな。

そんな俺たちを見て、灰原が半眼で言った。

「それで？貴方たち二人で納得してないで、私たちにもちゃんと説明してくれるんでしょうね？」

「何じゃと！？新一、あのヒントの意味がわかったのか？」

その言葉に、博士が驚いたように俺たちに詰め寄る。

「まあ、落ち着けて。ちゃんと説明すつからよ！まず初めに……」

その時、ソラが何故か拗ねたように言った。

「ねえ、説明は後からにしない？今は、彼らの言う『例の物』を取りに行こうよ。僕、早く違うところに行きたい！ここ飽きた！」

飽きたってあんたね…。

もうちょっと、シリアスな空気を読もうよ。

駄々をこねるソラに、皆の冷たい視線が突き刺さるが、ソラは何のその。

「ねえ、早く行こうよ！」

そう、さっきから繰り返している。

それに灰原は呆れ、博士は宥めて、俺たちは推理ショーの邪魔をされてちよつと不機嫌だ。

なので黙っていると、ソラは今度は怒ったように言った。

「もう！なら、僕は先に行くからね！！行こう、工藤君」

「…へ？っわっ！？」

そう呼ばれたと思ったら、急に腕を引っ張られた。

「ちよっ、待つ…！！」

黒羽の焦った声が、途中で途絶える。

「……は？」

次の瞬間には、回りの景色が変わっていた。

「ここでしょ？西森洋一が『例の物』を隠した場所は」

ソラの、得意そうな声が聞こえる。

目の前には、回転する『赤と青と白』の模様。

そして、『かみがみ』を切り倒す場所。

「……………」

無言で睨み付ける俺に、ソラは静かに笑う。

看板には、綺麗な文字でこう書かれてあった。

【美容室スカリエット】…と。

【皆で謎解き！】（後書き）

はい、今回はここまで

簡単だったかな？

次回は、答え合わせを行います！

自分の推理と当たってるか、確認してね。

では、次回をお楽しみに！

チシャネコでした。

【答え合わせ！】（前書き）

はい、チシャネコです。

今回は、題名通り『答え合わせ』です

さあ、皆さんの推理は当たっていたかな？

簡単だけどね。

では、チシャネコが創る物語をお楽しみ下さい…

チシャネコ。

【答え合わせ！】

種が分かりや簡単な事だ。

まず、第一のヒントの『神々を斬り倒す』とは、そのまま『髪々を切り倒す』ということ。

単純に、『神』と『髪』を引っ掛けたのだろう。

中年のおっさんが、考えそうな事だ。

そして、極めつけが第二のヒントである『炎と水と白』。

これは、理髪店などの前で回っているサインポールのこと。

あれは確か、赤が動脈を、青が静脈を、白が包帯を表しているんだ
つけ。

この事を合わせると、例の物を隠した場所は『美容室・スカリエツ
ト』になるわけだ。

「ほら、ほら。ぱっぱと行いじよ」

そんな事をつらつらと考えていると、ソラがさっさと中に入ってしまった。

「あ、おい！待って…」

ソラが入ったのを見て、俺も慌てて中に入る。

人を連れだしといて、置いていくなよ！

「いらっしやいませ！…坊や、一人？」

中に入ると、店員さんがニコリスマイルで話し掛けてきた。

「え、あ…ううん。お兄ちゃんと一緒に来たの。あ、いた！待って
」！」

店の奥へと消えそうなソラを指差して、（表面上は）笑顔で走って
いく。

「お兄ちゃん、待ってー！！もう！僕を置いてくなんて、ひどいや

「！」

「ああ、ごめんよ。兄さんが、ちょっと早かったかな？今度は、置いていかないように気をつけるよ」

ソラは、そんな俺に気づいてニッコリ笑うと頭を撫でた。

…演技だったのは分かってるけど、ムカつく！！

はたから見ると、仲の良い兄弟に見えるのだろう。

周りから、和やかな雰囲気視線が送られてくる。

……何だかな。

「　　」

ソラはそういう視線は気にしないのか、鼻唄混じりに歩いて行く。

まったく、お気楽なもんだな。

そう思うが、表面には出さずに演技を続ける。

「ねえ、お兄ちゃん、どこに座るの？」

「んー？ああ、こっちだよ」

ソラに続いて、どンドン店の奥に入る。

そして、店の一番奥にあるスペースに着いた。

「じじって…」

託児所じゃねえか！！

ま、まさか…っ！

「さ、着いたよ。僕は散髪を済ませてからくるから、そこにあるお人形でも遊んで待ってて」

「あ、ちよっ、おい…っ！」

そう言うだけ言って、本当に置いて行かれた。

…あの野郎、後で絶対ぶっ飛ばす！！

周りには、家族の誰かが散髪をしているのだろうちびっ子が。

うへえ、俺にどうしろと？

ふて腐れるようにしていると、あるものが目に入った。

「人形…」

目の前には、ウィンドケースに飾られた6体の人形が。

「クラウド…リオン…アリアス…ハロルド…ジューダス…スカリエ
ット…」

それは、暗号に出された6体の人形だった。

「成る程。流石に、ゲームキャラの名前を店名にしてるだけあって、
何かしらグッズは飾るだろうな。……ん？」

人形が飾られているケースには、大々的に紙が貼られていた。

【謎を解いて、お店限定人形を貰おう！】

どうやら、この人形たちは何か謎々を解いた者に景品として貰えるらしい。

しかも、参加年齢は小学生までの子供。

大人からのカンニングが出来ないように、口出した時点で失格になるという。

…子連れの客限定ってやつか。

全店舗で、同じイベントを行えば良いカモフラージュになる。

考えたな。

奴らが店に来て、こんな奥の託児所にまで来るとは考えにくい。

それに、例えば奴らがこれに気づいたとしても、その時には景品として渡されてるってか？

西森の策に感心しつつ、早速、店員に声をかける。

「ねえ、お姉さん」

「なあに？坊や」

営業スマイルを浮かべるお姉さんに、無邪気な子供を演じて言う。

「僕、あのお人形が欲しいんだ。だから、この謎々やってみたいんだけど」

「うふふ…分かったわ。クイズに参加するのね。坊や、どのお人形が欲しいの？」

欲しい人形。それはもちろん…

問い掛けるお姉さんに、元気よく答える。

「このお店と同じ名前であり、神様のゲームの最後の神……」
「スカリエット」
「……」

その答えに、お姉さんは、まさか男の子が欲しがるとは思って無かったのか、目を丸くしていた。

だが、何故か満面の笑みを浮かべると、妙に楽しそうに案内してくれた。

クイズを行う場所は、託児所から少し離れた一部屋。

入口には、大々的に『クイズの部屋』と書かれてある。

そこまで案内してくれたお姉さんは、去り際にコソッと耳打ちしていった。

「彼女、喜ぶと良いね」

「え？あ…」

妙に楽しそうだったが、そういう事か。

俺が人形を取って、女の子にプレゼントすると思ったらしい。

まあ、どう見ても女の子が好きそつな見た目だしなあ。

フリフリのお姫様のような服に、天使のような羽根の生えた人形。

…うん、いらねえ。

その後、無事クイズに正解して人形と店の割引券をGetした。

問題は全部で三つで、年齢によって違うらしい。

今回は、神様のゲームらしく神様関係の問題で、『神様が最初に創った人間は？』とかだったけどな。

まあ、中身は高校生だし、これくらい簡単だ。

名前と住所を聞かれたが、うまくごまかした。

後で、奴らが奪いに来たら厄介だし。

好きな女の子にプレゼントする時に驚かせたいから、内緒にして欲しいと言ったらすぐ了承してくれた。

案内人のお姉さんに連れられて託児所へ戻る際、手早く景品の人形を調べる。

「…っ！あつた！」

しばらく探していると、人形の被っていたティアラの飾りに隠してあつた小さなSDを見つけた。

おそらく、これが奴らがいう『例の物』だろう。

これで、何か奴らの手掛かりを掴める！

「…人形の方は、後で歩美にでもやるか」

きつと、すごく喜ぶだろう。

人形をリュックの中に入れ、SDは手帳に挟んでズボンのポケットに入れる。

そして、託児所へ歩いて行くと最初に別れた場所にソラが立っ

た。

「やあ、工藤君。いい子にしてたかい？その様子だと、無事宝物は見つけたかな？」

「ああ、見つけたぜ。もう用事は済んだし、早く灰原たちに合流しないと…」

多分、あつちには黒羽が何とかしてくれているだろうがやはり心配だ。

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、ソラは笑顔のまま告げる。

「そうだね。このまま二人でデートしても良いけど、やっぱり人数は多い方が楽しいし」

「デートって…お前な」

呆れた眼差しをソラに向けつつ、急いで店を後にする。

確か、此処から東都タワーまでは少し離れていたはずだ。

奴らがまだうつろっているかもしれないから、何処かで落ち合わない

と…

）

）

）

「ん？」

そう考えていると、ポケットに入れていた携帯が鳴った。

【答え合わせ！】（後書き）

まず始めにお詫びを。

すみません！！

仕事が始まったおかげで、更新がだいぶ遅くなってしまった…。しかも、二ヶ月以上って…本気ですみません。

仕事忙しいけど、こっちも更新出来るよう頑張ります。

では、話しは換わりまして。

今回の答え合わせ、いかがでしたか？

かなり簡単だったと思います。

（だって、チシャネコ推理小説は好きでも自分であまり描けない…）

やっぱり難しいですね。

というか、ちょっと展開が速いよね。

てなわけで、これからはもっとゆっくり展開していくので、お楽しみに～

チシャネコ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3555k/>

悲しみの読者†

2010年10月10日16時58分発行